UC バークレー校の大学院教育
――考古学領域における次世代育成

羽 生 淳 子　　カリフォルニア大学バークレー校

室長：今回は30回という記念すべき回になりましたが，カリフォルニア大学バークレー校教授の羽生淳子先生にお話しいただくことになりました。考古学領域における次世代育成ということで，今日は若い方たちもたくさん聞きに来ておられて，いろいろ有益なお話がお伺いできることと思います。先生のご紹介と後の進行については，山本先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

司会：考古学研究室の山本でございます。私のほうから，今日の講師の羽生淳子先生の略歴をご紹介させていただきます。

先生は慶応大学のご出身で，慶応大学ご卒業後大学院に進学され，大学院を終えられた後，東京大学理学部の助手として1984年から勤務され，1988年に助手を退職されてカナダのマギル大学に留学し，PhD（課程博士）を取得されております。現在お勤めのカリフォルニア大学バークレー校ですが，1996年から勤務されており，ちょうど 1 年前の2010年 7 月に教授に昇格されております。

先生のご専門は環境考古学で，特に狩猟採集民について研究をされ，そうした研究の一環として縄文時代も研究されております。そうした関係もあり，青森県の三内丸山遺跡，縄文時代前期から中期の遺跡ですが，そこの発掘調査にも長年携わっておられます。

先生のご業績に関しては，バークレー校の教授をなさっているわけですからたくさんおありなのですが，今日はその代表的なものをご紹介させていただきます。2000年に『古代文化』という雑誌に『縄文人の定住度』という論文を 2 回に分けて掲載され，ケンブリッジ大学の出版会から2004年に『Ancient Jomon of Japan』という単著を出されています。最近出版された本といたしましては『Evaluating multiple narratives』があります。

教育面に関しては，先生はバークレー校の学生さんを連れて，青森県の合子沢松森遺跡の調査も行われております。そのときの様子は，SAA（Society for American Archaeology）の雑誌にも紹介されております。

最後に，今日は学生の方もたくさん出席されていますので，先生のお勤めのバークレー校がどれくらいすごいのかということについて，簡単に触れておきます。バークレー校の創立は1868年でよろしかったでしょうか。

羽生：はい。

司会：日本でいいますと，江戸幕府が大政奉還をした翌年に創立されております。

それから，世界の大学の格付けランキングみたいなものがいろいろな調査機関から発表されておりますが，バークレー校は，ハーバード大学やケンブリッジ大学と並んで，絶えず 5 番以内にランクされている大学です。名古屋大学の場合は，200番に入ったり入らなかったりというところでしょうか。それくらいバークレー校はすごいということです。

最後になりますが，文部科学省が大学院教育に関する模範例を出してくるのですけれども，よく使われるのがこの「バークレー校の大学院教育のプログラム」になります。こうした内容を今日はお話しいただけるのではないかと思っております。では，先生，よろしくお願いいたします。

羽生：ありがとうございます。座ったままでよろしいでしょうか。済みません。

ご紹介いただきましたカリフォルニア大学の羽生と申します（スライド 1）。今日は暑い中，皆さま，わざわざ来ていただいてありがとうございます。山本先生からお話をいただいたときに，最初は「考古学領域における次世代育成」ということでお話をいただいて，では考古学の話をすればいいのかなと思って準備を始めたのですが，その後で，メインのタイトルは「UC バークレー校の大学院教育」だということを伺いまして，慌ててひっくり返したようなところもありますが，限られた時間の中でなるべく，研究の話，それから大学院教育の話，組み合わせていきたいと思います。人数も少ないことですし，途中で質問がおありでしたらご遠慮なく言っていただいて結構です。

今日の話の順番として（スライド 2），まずは，考

古学における大学院教育を考えるとき，大学院教育の目的とは何なのかという一般的な話。日本で考える考古学教育の目的，それから北米の考古学教育の目的を考えますと，やはり「考古学とは何なのだろう」という疑問を抜きにしては話ができませんので，その違いというようなところから，私が日本と北アメリカを行き来していた間でどういったことを考えたかを，まず少し皆さんにお話ししたいと思います。

次に，バークレー校の大学院教育と考古学の実際ということで，人類学科の PhD のプログラム，それからそれに関連しまして，私が所属していますのは人類学科なのですが，実際に日本の考古学の勉強をしている学生を育てるに当たっては，アジア研究の Institute of East Asian Studies，それから Center for Japanese Studies，これらと密接に連絡を取っております。ですから，そういった接点についても少しお話したいと思います。

最後に，少し時間がありましたら，実際にそういった枠組みの中で東アジア考古学研究室がどういったことをやっているのか，それが学生を育てる上でどういう意味があるのかを，時間の許す限りお話させていただければと思います。

第 1 番目の「考古学と大学院教育」ですが（スライド 3），大学院教育の目的ということを考えますと，やはり，なぜ学問をやっているのだろうという疑問にある一定の答えがないと説明できないと思います。皆さんに「大学院教育の目的とは」という大きな質問を出しますと（スライド 4），恐らくここにいらっしゃる十数名の方々，それぞれ考えていらっしゃることは，重なる部分もあると思いますが，一つの目的ということはない。それは当然なのであって，皆さんいろいろな大学院教育のアスペクトがありまして，その組み合わせとして，教員として大学院生の教育をしている。

私が PhD 課程に入学するためにカナダに行ったときに最初に感じたことは，学問の目的というものが違うわけではないのですが，強調する部分がかなり異なっている。まず，教育ということ考えるときに，どういった研究をするか。また，研究をするためには，その基礎になるデータを作る必要がある。ですから当然，研究の中でフィールドに行ったり実験室で実験を行ったりしてデータを得るという作業がある。データを作っても，それだけではもちろんだめなわけで，それを解釈するという作業が必要になる。解釈するに当たっては，新しい理論的視点から切り込んでいく。

よく私は大学院生に言うのですが，特に修論や博士論文を書くときには，実際に扱っているものは，ものすごく複雑なごちゃごちゃとしたものである，このごちゃごちゃとしたものそのまますべてを，読んでくれる人に伝えようとすると，ものすごく複雑なものになってしまって分からない。だから新しい自分の切り口を決めて，ぐちゃぐちゃのものをすぱっと切ってみなさい。切った新しい断面で何が見えたかということを伝えられれば，あなたの修士論文なり博士論文なりというのはいいのだよと。そのすぱっと切るときの切り口というのが，新しい理論的な視点の提示になるのだと思います。

これはもちろん教育者の方々，それから大学院まで来るような学生さんたちは皆分かっていることだと思

いますが，その中でどれに重点を置くか。3 つ必要なのだけれどもどこに重点を置くかというときに，少なくとも日本の考古学では，データを積み重ねていく，まずそこをきちんとやらなければ解釈まで行けないのだよと。

解釈をするためにはもちろん理論的な視点が必要なのですが，どこに重点を置くかということを考えたときに，カリフォルニア大学バークレー校に行って最初に驚きましたのは，うちの先生たちというのは，新しい理論的な視点を出す，ここに命を懸けている先生が大部分なのです。私は慶應義塾大学の修士課程で，先生は鈴木公雄先生という方でしたが，「日本考古学というのは，データの積み重ねに時間をかけすぎている。そうではなくて，新しい視点を学んで，それを使って新しい解釈を出していくのが君たちの仕事なのだよ」ということを，学部から修士の間にかけて何度も何度も先生に言われました。データを集めるのに夢中になって，だんだんそっちに引きずられそうになるたびに，鈴木先生が「君の仕事はそれではない。新しい解釈を新しい視点から出していくことなのだ」ということを，耳にたこができるほど言われましたので，自分ではどちらかというと 2 番目 3 番目のほうに中心を置いている研究者だと，バークレーに行くまでは思っていたのです。

ですが，バークレーに行ってみましたら，周りの先生たちのやっていることというのは，ものすごく切れる人たちが新しい視点を出すということ一点に命を懸けていて，新しい理論的な視点を実際のデータにアプライしてそのデータの解釈をするというところですらも，二の次になっているようなところがあります。これがいいことなのかどうなのか，どっちがいいと言えるような問題ではないわけです。新しい視点だけを出すところに夢中になってしまうと，新しいものの企画倒れといいますか，音楽でいえば，音楽史の歴史を知っている方にとっては現代音楽というのは確かに面白いのだけれども，それを知らない人が聞いても「いったい何なのだろうこれは」ということが時々あると思いますが，社会科学の分野でも少し似たようなところがありまして，考古学でいいますと，90年代ぐらいまでにポストモダンが少し遅れて入ってきてすごくはやったときに，ではその次に新しいもの，というところで出していったときに，理論で言っていることは面白いのですが，それをデータに実際に適用して出てきた解釈に何か意味があるかといったら，これはあまり意味がないのではないかというような研究も随分出てまいりました。

ですから，どちらがいいというものではないのですが，前に進む部分と前に進める部分ということを考えたときに，バークレーの研究では，前に進める部分ということを強調しているということはあると思います。その功罪，メリットと弊害はどちらもあると思いますが，学生たちには「新しい理論的視点というものを出していくことが，君たちの一番の使命なのだよ」ということを強調している先生が多いと思います。それと少し重なってくる部分もありますが，どちらに偏っているかは別として，バークレーに行ったときに年配の先生たちから随分言われたことが，「学問全体に対する長期的なインパクトのある研究をしなさい」ということです。もちろんどんな研究でも面白いのだけれど，20年後の人類学ということを考えたときに，あなたのやっていることが果たして人類学的な考古学，あるいは人類学全般に対してインパクトがあったのか。幾ら縄文時代のことを研究しても，その縄文時代の細かな部分が分かっても，「人類学的考古学に対して羽生淳子が貢献したと20年後に言えるかどうかということを考えながら研究テーマを選びなさい」というふうに周りの人が言ってくれました。これは随分ありがたかったと思います。マギル大学でも研究というものの厳しさは教わりましたが，バークレーに行って，学問全体に対するインパクトを考えなさいと，何度も何度もいろいろな人から言われまして，やはりそういうことを考えながら研究をやるのが大事なのだなと。インパクトがあるというのは，新しい理論的な視点の提示ということだけではないわけで，新しいデータを出しても学問ががらっと変わってしまうこともあるわけですから，理論かデータかという continuum のどこに自分を置くかということだけではなくて，自分のやっていることがどれだけ学問に対してインパクトがあるか，それを常に考えながら研究をしなさいと。バークレーに行きまして，年配の先生たち，同僚たちからそういうことを随分言われましたので，学生たちにも，この 2 つについてはなるべく分かりやすいように，機会があるごとに説明をする，そういうことを考えながら研究をしてもらいたいと，いつも言っております。

ただ，学問全体のインパクトといいましても，学問自体が何を目指しているのだろうということを考えますと，日本考古学，北米考古学というものは必ずしも重なってくるとは限りません。なぜ重なってこないかといいますと，やはり日本の考古学が目的としてきた

もの，それから北米の考古学が目的としてきたものの違いということがあると思います。その違いというのは，長い歴史の積み重ねといいますか，そういった中でいろいろ出てくる。きょうは考古学の専門でない方もたくさんいらっしゃるのでなるべく短くしますが，日本考古学というのは，いろいろな意味で社会科学の中でも特殊な学問だと思います。なぜかといいますと，高度経済成長に伴いまして，膨大な数の「行政発掘」と私たちが呼んでおります緊急発掘，建物を建てる，新幹線を造る，それから高速道路を造る，そういったものに付随して，ともかく壊されてしまう遺跡の記録を残しましょうということで，大学だけではなく，都道府県の行政，教育委員会，それから奈良国立文化財研究所といったところがみんなで発掘をするということが，60年代末70年代ぐらいから起こりました。それで非常にたくさんの資料を得ることができましたが，その過程で，学問として必要という以前にまず資料を集めましょうという，さっきの3段階でいいますと最初のところにものすごく振り子が振れてしまったところがありまして，そのメリット・デメリットがあると思います。

日本考古学の長所を考えますと（スライド5），そういった歴史の結果として膨大なデータの蓄積がされた，それから，日本人の研究者というのはまじめですから，そういったデータをきちんと分析する，分析するに当たっては，自然科学の方と共同作業をやっていこうと。ですから，遺物，発掘されたものの化学成分の分析，年代測定，それから遺跡のそれぞれの土の中から出てくる動物や植物の遺体を分析することによって，当時の環境を復元する，そういった分析は非常にたくさんなされました。もう一つ別の側面としては，教育委員会の方と一緒に仕事をするということは税金を使って発掘するということですから，一般市民の方々へ考古学の成果を還元していかなくてはいけない，それが非常に強調されております。

それから，戦後の50～60年代ですね，特に歴史学の一分野としての考古学ということで，史的唯物論，マルクス主義的な考え方から考古学を推進する先生がかなりの数おられたのですが，その方たちが「私たちの祖先の歴史を正しく解明する」と。何が正しいかというのはいろいろ議論があると思いますが，戦争中の非常にナショナリズムに偏った政治的な解釈ではなくて，遺物を見て，本当に何が起こったかということをもう一度考え直してみようといった，ある意味での使命感というものが，60年代ぐらいからの考古学者の多くにはあったと思います。

行政担当，アマチュアといった方も緊急発掘の過程でたくさん考古学に関わっていらっしゃるので，裾野が広い。良く言えば裾野が広いのですが，プロの学問としての研究者とそうでない人との境目が曖昧という問題でもある。これはプラスになるかマイナスになるか，どちらに転ぶかは，私たちの努力次第だと思います。いい意味で言いますと，地方に行きましても，歴史の先生とかお寺の住職さんですとか，考古学のことをものすごくよく知っていらっしゃる方というのはたくさんいます。

そういったメリットと引きかえに問題点もありまして（スライド6），1つには，理論的な枠組みというものが，北アメリカの考古学と比べると必ずしもはっきりしていない。これはデータの蓄積というところに重点を置き過ぎたことも一つあると思いますが，理論というものの枠組みとして，社会科学の中で考古学理論をどう位置づけるかというディスカッションが，考古学者の中で必ずしもきちんとされていない部分もある。

2番目に，海外との交流が，特にここ20～30年はだんだん不足してきているのではないか。これは非常に残念なことで，私，80年代後半にカナダへ行きましたが，博士課程を海外で取ってこようという考古学者が，恐らく30人ぐらいはいたのではないかと思うのです。周藤先生のほうが具体的な数字をご存じかもしれませんが。日本のことをやっていても，枠組みは海外と共通のものを持ちたいからアメリカなりイギリスなりカナダなりに行ってみようという人がもっと多かった。今は就職の問題もあるのでしょうが，なかなか海外に出にくいということがあります。私，去年まで Henry Luce 財団というニューヨークの個人財団の Advisory Board に入っていまして，考古学の奨学金の審査もしていました。アジアからの奨学金を受け付けていましたが，最初の年は日本から数名応募者がありましたが，2年目以降はゼロでした。中国からは何十人という応募が来るのに，なぜ日本は一人もいない。韓国でも7～8人とか，毎年来るわけです。それで「日本がいないというのは理解できない。なぜだ」と，かなりの研究者から聞かれました。日本の，なかなか出にくい事情というのもあるし，日本では，海外で研究することを必ずしもすべての大学の先生が推進しているわけではないと，そういったような説明をしましたが，このままですとだんだん交流がなくなってしまうので，非常に危機感を持っております。

それと少し関係して，考古学というのはいろいろな学問との交流がないと進んでいけない学問なのですが，学際的な研究というものが必ずしもうまくいっていない。よく言われますが，考古学というのは社会科学としての側面，ですから Social theory のくるくると変わる理論についていくという必要性が片一方であり，もう片一方で自然科学的なデータがないとできない学問ですから，気候変動，形質人類学，DNA 分析といった化学分析，生物学的な分析，その両面がないとできないものですから，どちらの面でも学際的な研究が非常に必要なのですが，日本考古学全体としては必ずしもその提携がうまくいっていない。そういった意味で，国立大学，東京大学，京都大学，名古屋大学はもちろんですが，そういったところで海外との交流，それから学際的な研究の必要性というところをうまくやっていただけるといいな，と考えていたときに，ちょうど山本先生から今回のお話をいただいたものですから，そういったことでしたら喜んでお話をさせていただくということで来たわけなのです。私としては，現代日本考古学というものに非常に危機感を持っております。歴史的に見てみますと，日本考古学はいつでも閉鎖的であったかというと，必ずしもそうではないわけです（スライド 7）。明治から大正期の研究史を見てみますと，海外から優れた研究者が来て非常に活発な交流があった。日本考古学の初めの頃の歴史を見てみますと，言葉の障害というのは今よりももっとあったと思いますが，交流はあったと。それがここになって交流がないというのは，「言葉ができません」では言い訳にならないという気がします。

もう一つ，第二次世界大戦後から1960年代までは，枠組みとして史的唯物論という言い方をしますが，古典的なマルクス主義というのがいいか悪いかは別として，社会科学の体系の一つとして取り入れるという動きがあったのが，70年代の初めになってそれが下火になったときに，新しい枠組みが理論的枠組みとしてははっきり出てこなかった。今，日本考古学の理論的枠組みは何でしょうと言いますと，はっきり言いまして，これが海外でも通用する理論的な枠組みですというものは，なかなかお答えしにくい。何があるのかというと，やはりこの60年代まで続いてきた古典マルクス主義が底流として部分的には残っています。それがどうもうまくないのだということで，そこから脱却しようとしたときに，新しい海外とのつながりが必ずしもはっきりしないままで，個々の日本の先生方が「私はこう考える」という考えを出していらっしゃったものが，それぞれの大学でも主流になっているのだと思います。それが悪いというわけではないのですが，海外に出したときにどういうつながりがあるのだろうということを説明するのが非常に難しい。ですから，部分的には非常に面白いアイデアがあるのだけれども，海外に説明するときに，では大きな理論的な枠組みは何でしょうかというところの説明がしにくいというところがあります。これは，今まで日本で積み上げてきたものを捨ててしまうというよりも，こういった研究が外とつながっていくことを考えたときにどのようにつながっていくのかという作業が，もう一つ必要なのかなと私は思っています。

それから，先ほど申し上げましたが，高度経済成長期から90年代にかけて，緊急発掘の増加と埋蔵文化財行政の整備が行われた時点で，非常にたくさんの遺跡の発掘が行われて膨大な資料の採集が行われた。今，研究室の報告書の蔵書を見せていただいたのですが，考古学の発掘は，各市町村の教育委員会なり考古学のセンターというものが発掘調査報告を出しています。これは世界に誇れる業績でして，普通，アメリカで発掘をやりますと，10〜20部しか報告書は出ていないのですが，日本では300部なり，少し前までは500部なりのものが，日本のメインになる大学の図書館，教育委員会には入っています。ですから，それを見るだけである程度のことは分かる。これは素晴らしいことですが，これが学問としての体系をうまく結びつけるかどうかというところになると，なかなか難しいところもある。これから逆に発掘調査が下火になりまして，少し考古学者のほうに余裕ができてきましたら，これをどう使うかということをもう一度考え直す時期に来ているのかなと私は思っております。ですから，90年代後半から現在にかけて緊急発掘が減少してきて，どこの地方自治体でも発掘のお金がない，新しい人を雇うお金もない，危機感はあるのですが，こういった状況を逆にプラスに転じるという発想も必要なのかなと思います。

こういった日本の状況，今まではデータを集めるということに重点を置く，それから理論的な枠組みというのがないわけではないのですが，海外の人に説明しにくい，そういったものと比べますと，北米考古学というのは非常に異なった歴史を持っています。先ほど申しましたように，北米考古学では，少なくともバークレーのような大学の先生たちは今，新しい枠組みを出すことに必死になっています。もっとも北米全部がそうかといいますと，必ずしもそうではないわけで

す。Society for Archeologyという学会がありますが，日本でいいますと日本考古学協会のようなものです。そこの会員は7,000人ぐらいだと思いますが，その7,000人のうちどれだけの人が理論のことを考えているかというと，これはまた別問題になるかと思いますが，少なくともバークレーで大学院教育をするときには，理論というものを重視する。

英米考古学の歴史的な背景としましては（スライド8），80年代ぐらいまでは，いわゆるプロセス考古学，これは社会科学の大きな枠組みでいいますと，サイエンス，科学を中心にした社会科学としての構築。これに対してポストプロセスと呼ばれる，ポストモダンの流れと言えばいいと思いますが，この両派というものが，80〜90年代の初めぐらいまでにかけて非常に対立するような形で研究をしていました。その中でいろいろな流れが出てきたと思うのですが，1つ注目されているものとしては，multi-vocalityと呼ばれる，いろいろな立場の人がいろいろな解釈を出してもいいのだという考え方があります。今そこに回していただいた本でも，少しその話をしています。一方で，ポストモダンの極としてそういった考え方が出てきて，他方で，環境考古学，それから現代の環境問題の中で考古学というものがどういった貢献ができるかという，サイエンスに戻ってくるような流れというのがごちゃごちゃとなりながら，研究者みんなが，では次に何をやればいいんだろうということを，いつもわいわいがやがや言いながらやっているような状態です。

考古学のご専門でない方はプロセスとポストプロセスということを全く聞かれたことがないと思いますので，ごく簡単に説明しますと（スライド9），プロセス考古学といわれますのは，ここに挙げているようなサイエンスとしての考古学を強調するもので，60年代後半から80年代初めぐらいまで，考古学で非常にはやりました。これがはやったというのは，文化人類学と比べると10〜20年遅れているような感じはありますが，60年代ぐらいまで資料集め一辺倒だったものから，サイエンスとしての考古学にするためにはどんなものが必要かということで，ここに挙げました論理的実証主義に基づいた科学としての考古学，それから解釈の客観性を重視する機能主義に基づいた解釈をメインに据える，それから進化の概念というものをもう一度考え直してみる，エコロジカル（生態学的）なアプローチを考える，これが80年代前半ぐらいまではアメリカでは主流になっていましたが，これに対する批判というのが80年代ぐらいから出てきまして，それがいわゆるポストプロセスと呼ばれているものです。これが考古学ではほかの社会学からは遅れているのですが，いわゆるポストモダンの考古学バージョンという感じになります。

ポストプロセス考古学の諸学派といいますのは（スライド10，11），プルーセルさんという，ハーバードで少し前まで教えていて研究史のことをいろいろ書いている方の論文から拝借したのですけれども，うんと大きく分けると，新マルクス主義系，ポスト構造主義系，フェミニズム系という3つの立場からいっている。ポストプロセスというのは，ポストモダンの考古学バージョンと言いましたが，実際問題としては80年代までここでいろいろ出ていたものに対する反論をした人たち全部を総称してポストプロセスという言い方をしていますので，いろいろ理論的な立場に立って新しく考古学の研究を出していこうということで，こういった理論的な立場に立った人がいろいろな立場から，90年代の初めまで「サイエンスとしての考古学はだめなのだ，私たちは違う視点から出していくのだ」と，これが90年代初めぐらいまで非常にはやりました。これがはやっていたときに，私はちょうどカナダへ行きまして，そこで「エコロジカルな立場から縄文人の定住度についてやりたい」と言いましたら，最初は先生たちが「ええ，そんなことやるの？」と目を白黒とさせていたようなところもありました。ちょうど90年代初めぐらいでまた，そういった研究も出てきていいのでは，というところに流れが変わってきたのでよかったのですが，90年代初めぐらいまでは，こういったことをいろいろ考える先生たちというのがたくさんいました。バークレーの考古学というのは，変化が起こるに当たって，こういった新しい視点を出していこう，特にフェミニズム系の視点を出していこうと言った先生が非常に集まっているところでして，今でもポストプロセスの牙城と思われている大学です。

そういう歴史的なバックグラウンドがある中で，90年代以降の英米考古学というのは再び多様化の道を進んでいると思います（スライド12）。1つには，Triggerという先生は私がマギルでお世話になった先生なのですが，こういった人たちは一時プロセス考古学を批判していたのですが，今度ポストプロセスであまりにも新しいものばかり強調しすぎて，その結果データというものがおろそかになってしまった，おろそかになっただけでなくて，非常にミクロな視点での研究というのが増えてしまった。例えば，個々人の主体性という

ものを強調するあまり，大きな文化変化とか通文化的な比較とか，そういったものに対する関心が欠落してきてしまったのではないか。でも，それもやはり大事なのだよ，と。

それから，考古学的な客観的な解釈というものに対して，90年代の初めぐらいまでいろいろな研究者が批判をして「客観などというものはない。誰がやっても主観は排除できないのだから，主観的な解釈になってしまうのは仕方がないんだ」ということが非常に強調された結果として，いわゆる Hyper-Relativism といいますか，研究者の数だけ主観がある，その主観的な解釈というものがいろいろあっていいのだよということを極限まで推し進めてしまうと，ではどれがよりよい解釈なのかということまでできなくなってしまう。例えば，ストーンサークルがあって，これは宇宙人がつくったものという解釈と縄文人がお祭りのためにつくったものだという解釈と，どちらが蓋然性が高いかといえば，研究者としてこれだけのデータがあれば，こちらのほうがやはり蓋然性が高いというところまでは説明できるだろう，そういう意味で，極端な相対主義というのはよくない。

もう一つ，プロセスとポストプロセスというのは，80年代後半から90年代初めぐらいまでは，けんかしながらお互いに口もきかないような状態でやっていましたが，そうではなくて，ある意味でこれはマクロとミクロ，Subjectivity と Objectivity という形の両極端なのだけれども，相対するものというよりは補完的なものなのだというふうに考えてみよう，そういう考え方の中で，再び多様化の道を歩んできているように思います。これはもちろんそれぞれ大学によって違うわけで，今でもポストプロセスでなければ研究ではないと言っている大学もありますし，ポストプロセスなんてデータを見ていないからサイエンスではないといって切り捨ててしまう大学もありますし，大学によって違うと思いますが，うちの大学では建前としては両方を考えようということでいっています。

そういったことを考えるときに，2つ。1つは，ポストプロセスの極として，2000年代の初めぐらいに非常にはやった言葉に Multi-Vocality という言葉があります（スライド13）。この Multi-Vocality というのは，いろいろな立場の人がいろいろな立場から解釈を出していく，ある意味で Hyper-Relatives と紙一重になってしまいそうなところはありますが，この議論が出てきた背景といいますのは，考古学における解釈の性質というのは仮定に基づいた推論であるので，解釈

の客観性には必ず限界がある，特に現代社会の制約から逃れられず，政治的経済的な背景というものが必ず絡んでくる，ということを考えた上で，過度の相対主義にも警鐘を鳴らす。この両方のバランスを考えながら，いろいろな立場の人がいろいろな解釈を出すということを考えてもいいのではないか。バークレーの考古学は，この動きをアメリカで最初に始めた大学だと思います。

Multi-Vocality の概念を今説明しましたが（スライド14），さまざまな立場の人がそれぞれの視点から複数の解釈を行う可能性を支持する考え方で，さまざまな立場の人とはどういう人がいるのだろう。考古学者はもちろんですが，他の分野の専門家は違う視点がある。それから，地域の住民の人たちの視点もある。アメリカの場合ですと，遺跡を残した人々の子孫の方々も彼ら独自の視点がある。こういった従来の60年代ぐらいまでの考古学はサイエンスで，1つしか真実はないのだという考え方に立つと，考古学者が研究をする場合にはほかのものは全部切り捨てるような形になったわけですけれども，そうでなくて，いろいろな人が複数の解釈を行う可能性は支持する。特にその中でもマイノリティー，Native American，African American といった方の視点というものが，切り捨てられないように気を付ける。これの背景にありますのは，ポストモダン，ポスト構造主義の思想，それからもうちょっと実際的な面ではマイノリティーの権利拡張を始めとする社会運動，過去に対する解釈は考古学者の専有物ではないという認識，といったものです。

具体的に言いますと，例えば Michael Blakey という先生がニューヨークで，アフリカから連れてこられた人たちの子孫のお墓を発掘しました（スライド15）。この発掘に当たっては，現代の African American の人たちに，研究の企画を立てる段階からコミッティーに

入っていただいて，どういったことを知りたいのかをその人たちの立場から出してもらう。それを受けて研究者が，そういうことを知りたいのであれば何ができるだろうということを考えてみる。例えば化学分析でも，こういったことは知りたいけれどもこういったことは骨を壊すのでやってほしくないとか，直接の子孫でなくても African American の方々からコメントが出るわけです。考古学者もそれを丸のみにするのではなくて「それは分かるけれども，こういうことが分かれば次にこういう研究もできるのだよ」といった形でディスカッションをしながら，お互いに納得のできるところを見つけていくといったプロジェクトが行われました。

この先生は，その本（スライド16）の中でも chapter を書いていただいていますが，いただいた中で一番いい原稿だと思います。

司会：chapter 2ですね。

羽生：chapter 2『An Ethical Epistemology of Publicly Engaged Bio-Cultural Research』という論文を書いていただきました。この中でも言ってくださっていますが（スライド17），考古学者の責任というのは，一つには推論の道筋を明示する。なぜそういう結論が出たかを「考古学者は偉いから，私たちが言っていることが正しいのだ」というのではなくて，専門でない人にも分かるように「こういう資料に基づいてこういう仮定に基づいてこういう分析をしてみたら，こういう結果になりました」ということをきちんと説明する。

それから，結論というのは必ずしも 1 つではない。現段階では作業仮説として複数の解釈が可能だ。こういう仮定に基づいたらこういう結果になったが，この仮定は間違っているかもしれない。この仮定を変えてみたら，今度はこういう結果になることもある。現段階ではどちらのほうが正しいかは言えないが，こちらの解釈のほうが別の解釈よりは可能性が高いというところまでは言える，といったことをきちんと説明する。そういったことをやっていくには，考古学者が知りたいことだけをやるのではなく，やはり一般市民の方々，その遺跡を残した人々の子孫の方々など，いろいろな形で遺跡に関わっている方々が何を知りたいのか，どんな研究をしてほしいのか，どんな研究はしてほしくないのかというディスカッションをしながら，市民と共同で問題提起をしていくことが大事なのではないかということを，アメリカ考古学でここ10年ぐらい，非常に盛んなディスカッションをしています。

もう一つ説明しますと（スライド18），この背景にありますのは，native American のいわゆる NAGPRA と呼ばれております，ネーティブアメリカン墓地の保護および再埋葬に関する法令というものが，91年だと思いますが，に出ました。これによりますと「過去に発掘された native American の人骨や副葬品は，子孫が特定できる場合にはその子孫に返還する」と。ただ，これはものすごく複雑で，「合衆国政府が公式に認めている部族に限ってはこれを返す」という法律です。子孫と言いましたが，ではどれを子孫というのかはものすごく複雑な話で，各部族によってこれまた規則が違いまして，256分の 1 まで生物学的なつながりがあれば子孫，tribe のメンバーとして認めるところもありますし，もっと違う基準を採用しているところもあります。ともかくものすごく複雑な法律なのです。

これが考古学に与えた影響というのは非常に大きなもので，アメリカの考古学は人類学的な考古学で，もともと白人が他者の文化を研究するという形で発展した学問なのです。これが native American の骨，それから人骨に伴っていた副葬品は全部返さなくてはいけないということになりますと，native American の方々と話をしながら研究を進めなければ研究ができない，というところに来ているわけです。アメリカの場合はこうですが，中米ないしカナダにも，似たような問題が出てきています。こういう中で子孫の方々，それから地元の方々と共同の問題提起をしながら研究をしていくのは，研究者としての理想論ではなく，非常に切実な問題となっています。

native American についてご存じない方のためにもうちょっと説明しますと，例えば native American の居留地というのは，カリフォルニアでは治外法権になっています。治外法権とはどういうことかといいますと，native American の tribe の長というのは，一応独立国家と同じ扱いになるわけで，そこと何かを交渉するということ，人骨を返すか返さないかという問題は，合衆国政府と独立国家扱いの長との 1 対 1 の交渉という形になります。特にカリフォルニアの場合ですと，居留地内にはカジノをつくる権利もあるわけで，それに伴って最近，非常にたくさん収益を上げている tribe もあります（スライド19）。それから，逆にそういうことをしないで，伝統的な生活をきちんと守っていきたいということで，「貧しいけれども私たちはお金では換えられないものを守っていく」というように，いろいろな立場の人たちがいます。

そういうことを考えますと，native の人類学は非常

にややこしい問題になっているわけで，そのど真ん中に考古学が位置していると考えていただきたい。そんな関係で，私はカリフォルニアの tribe の幾つかには，秋祭りなどに呼んでいただきました。このスライド（20）は Yokuts 族の秋祭りですが，こういったところに行きますと，長老の方々が子どもたちに，自分たちの tribe の今までの価値観がいかに大事か，それをなくさないできちんと守っていきましょうというような話をしているのを聞きまして，非常に心が洗われるような気持ちがします。そういったこととも関わってくるのがアメリカの考古学です。

さらに言いますと，バークレーといいますのは，native の人たちの研究は人類学，考古学で1900年代の初めからずっと資料を集めておりまして，人類学博物館にもそういった資料があります。再埋葬問題は非常に大きな問題になっており，正直申し上げますと，カリフォルニア大学の対応に不満を持っている tribe もたくさんあります。そういったことも考え，では tribe の方々と一緒に何をしていけるのかを考えながら，私たちの学科は研究していかなくてはならないわけです。

もう少し考古学者の方に見ていただきたいと思って，スライドを幾つか。これは別の部族，Miwok 族の復元の集落（スライド21）。これはヨセミテにあります。うちの学生たちの中には，mountain の方の Miwok ではないですが，もっと coast の方の Miwok 族の学生もおります。ちなみに右側はドングリの収蔵庫です。日本の考古学をやっている方は，ドングリに興味を持ってくださるのではないかと思います。

これはネバダの Lovelock Cave という，5千年以上前の非常に古い洞窟遺跡ですが（スライド22），こういったところの発掘も，バークレー校が昔やっております。

それからこれはうちの所蔵品ではないですが，大学が土地管理局から委託を受けて発掘された遺物の一部を持っていることもありまして，「ではそれをどうする」という話も出てきつつあります。

私も最初からこういったことを考えながらアメリカで考古学を始めたわけではなくて，カリフォルニアに行く前，カナダに行ったときに，カナダの先生が北極圏の Thule 文化の遺跡の発掘に91年に連れていってくださいました（スライド23・24・25）。このときに native Canadian の男の子たちが2人いましたが，向こうでは Inuit の男の子たちという言い方をします。その彼らが参加してくれたのですが，そのときにはそんなことはあまり考えないで発掘しました。これがそのときの発掘の状況です。これが91年代。カナダとアメリカの法律的な差がありますが，アメリカではここ20年の間に，そういったことを考古学者が真剣に考えなくてはならない状況に変わってきています。カナダでももちろん考えなくてはならないわけで，先々週私は，北海道の Bio-Archaeology のアルバータ大学とのプロジェクトのワークショップに参加しましたが，そこでアルバータ大学の先生たちが来ていて，北大の方々と一緒にプロジェクトを組むというので，Bio-Archaeology といいますと，歴史時代，考古遺物の骨も分析する。それに当たっては，北海道ですとアイヌの方々の人骨ももちろん問題になってくるわけで，正直言いまして，カナダの方々がどの辺までそのあたりを考えてくれているのか少し不安でしたが，お話をしてみたら，そのあたりのところは北大の方々などと非常にきちんと話をしているようで安心しました。

いろいろな話をしましたが，一方でアメリカ考古学，カナダ考古学は，そういった非常にポストモダン的な立場がある。他方で，2000年代になってもう一度サイエンスの側に対する振り子も振れてきている。その代表的なものは，いわゆる Environmental Archaeology（環境考古学）です（スライド26）。気候変動は，もともと考古学で非常に扱いやすい資料だと思います。例えば現代の気候変動の話をしても何十年という単位までしかなかなかデータが取れない。でも考古学は何百年，何千年，極端に言えば何万年というデータも見られるということで，気候変動などのディスカッションをするときに，考古の資料は非常に役立つのです。

私，去年4カ月間，京都の総合地球環境学研究所で訪問研究員をしていましたが，そこの方たちとお話をしていますと sustainability, resilience, vulnerability といった，環境のことをやっている人たちにとってキーワードになるようなものが，環境考古学の人たちの間でもキーワードになりつつあります。極端に言いますと，今アメリカで新しい教員の募集が出ているもので，どんな教員が欲しいかということを見てみますと，sustainability と resilience，といった言葉が必ず入ってくる形で教員の専門を定義した上で，募集が出ているのが非常に多いです。

ですから，ポストモダンの理論の片方に振れていたのが，また少し環境，Ecology, Biology に戻ってきているかと。ただ戻っているときに，がちがちのサイエンスではなくて，現代社会との関連の中で考える。例えば動植物遺存体，山本先生も研究なさっています

が，そういったものから分かる環境の変化，食生活の変化，もう少し小さなものでマイクロと言いましたが，花粉や珪藻分析といったような顕微鏡で見ないと分からないものから環境のことを考える。

それからもう一つ，Bio-Archaeology と私たちが呼んでいる人間の骨の分析です。昔は人間の骨の分析というのも，日本人の祖先はどこから来たかという origin とか，いつとか，そういった話が多かったのですが，それだけではなくて，縄文人の食べていたものはどんなだったのだろう，その人たちの暮らしはどうだったのだろう，男女の違いはどうだったのだろう，そういったものが個人の健康にどのように影響していたのだろう，そのようなディスカッションがたくさん出てきています。

最後に歴史生態学の台頭ということを挙げましたが，歴史生態学というのはここ10年ぐらい考古学で非常にはやりになっている言葉ですが，Historical Ecology という言い方をします（スライド27）。人間が環境に与える影響を重視した上で，人間と環境との相互作用を考えてみようと。これには縄文時代なんかで言います environmental management といって，狩猟採集民と言っているが，環境をかなり手間暇かけて管理していたと。ですから，ただ自然の恵みのおこぼれにあずかっていたわけではなくて，半分管理栽培のようなことをしていたのも含めて狩猟採集民と考えていいのではないかという議論が，縄文時代の研究では出ています。カリフォルニアでも同じようなことを言っていまして，カリフォルニアの狩猟採集民と言っていますが，この人たちはかなり積極的に environmental management をしていました。

もう一つ，歴史生態学では「過去の経済社会システムが世界各地に固有の歴史の軌跡をつくり出した過程の解明」を強調しています。各地で歴史というのは一様ではない。全部同じように進化してきたのではなくて，世界のあちこちでいろいろな歴史の過程があるのだと。極端なことを言いますと，日本の縄文時代というのは 1 万年以上にわたって，いわゆる狩猟採集に近いような生活形態が続いたと思われています。これは今まで，世界史の中での例外と思われていたのですが，例外ではなくてこれはいろいろなタイプのうちの一つなのだと。

3 番目に，文化の短期から長期的変化のプロセス解明。非常に短い瞬間的なできごと，それから数年から数十年単位のサイクルの何度も繰り返し起こるような出来事，それから何百年，何千年という形で変わっていく方向性のある変化。そういったものをいろいろなレベルで考えてみようと。考古学の資料としては短期から長期まで扱いますから，こういったものが非常にいろいろなレベルで扱いやすいということだと思います。

いろいろ言いましたが，アメリカで大学院教育ということを考えますと，こういったことを考えながら，それぞれの先生が「私は歴史生態学としての人類学をやっていく」,「私は multi-vocality ということを, native American の人たちと一緒に考えながらやる」など，それをやるというだけではなくて，なぜやるのか，今までそう言っていたが，次はどんな新しい方法が考えられるのかを考えながらやっているのが，アメリカの大学院教育だと思います。

ここでもうちょっと，Historical Ecology の話ですが（スライド28），昔，プロセス考古学のときに環境と人間との関係といっているのは，環境から資源，それから人間活動という，上のピンクの矢印が非常に強調されていたと思うのですが，そうではなくて，この両方の矢印を考えて，両方向の相互作用を考えていこうというのが，ここ10年間のいわゆる環境考古学と呼ばれているものだと思います。そういった中でわいわいがやがややりながら，かなりあくの強い先生たちがそれぞれ主張しているわけです。

私の研究室で，どういうことを考えてほしいかということについて学生たちにいつも強調していますのは（スライド29），実際の研究の分析でやっているのは，縄文人の定住度，生業や食の多様性の幅が広いか狭いか，それがどういった人口の数や社会の規模と関係しているのか，縄文時代でもかなり階層化していた社会だったのか，それとももっと平等な社会だったのかといったようなことを研究テーマとしているのですが，それは，ただこれが知りたいわけではなく，それと環境がどういうふうに関わっていたか，これは気候変動や人間が環境に与えた影響も含めて考える。それをもう少し大きく考えると，それが文化の長期変化に対してどういう意味があったのか。文化の長期変化のメカニズムを考えるときに，環境と人間との関わりが知りたい。それを考えるためにはこういったことをやりたい，これを忘れないで研究をしてほしいということです。

それがいつの間にか，縄文人はどのぐらい定住だったのかだけになってしまうと，全然面白くない話になってしまう。定住度の話をしていても，本当に知りたいのはこれ全体なのだよということを，学生にいつも

強調しています。

結構時間がたってしまったのですが，先へ進んでよろしいでしょうか。何かここまでで質問とかありますか。いいですか。

司会：はい。それとも，休憩を少し入れますか。大丈夫ですか。

羽生：これの次まで行ってからの方がいいかと思います。

司会：はい。分かりました。

羽生：そういった話を頭に入れておいて，では実際にバークレー校の大学院教育でどんなことをしているのか，どんなシステムになっているのかということをご説明します（スライド30）。

まず，カリフォルニア大学バークレー校というところへ行かれた方いらっしゃいますか。いつ頃行かれましたか。

A：私は3週間ぐらいですが，私自身は古代哲学をやっていまして，John Ferrari，彼と親しくて，翻訳をしたりしていて，それで2004年，もう少し前になるかもしれませんが行って……。

羽生：では，割と最近ですね，行かれたのは。

A：そうです。

羽生：そうですか。ではだいたい感じも分かっていただけるかと思いますが，もともとバークレーというのはすごくリベラルで知られた大学です。念のためご紹介します。カリフォルニア大学というのは，カリフォルニアに全部で10校あります。これはUC，University of Californiaと呼ばれています。カリフォルニアの州立ですが，いわゆるカリフォルニア州立大学と呼ばれているCalifornia State Universityとは別です。

バークレーはここにあります。ここがサンフランシスコで，ここはいわゆるベイエリアと呼ばれているカリフォルニア北部の中心になります。カリフォルニア大学というのは州立ですが，カリフォルニア州立大学とは別というのはどういうことかといいますと，カリフォルニアに住んでいる人で公立の大学に行きたい人は，カリフォルニア大学かカリフォルニア州立大学かどちらかに行くわけですが，カリフォルニア大学というのは，その中のトップの12.5％が入れる大学ということになっています。その中でバークレーというのは，ランキングにすると，UCLA（University of California, Los Angels）というものと並んで，競争率が高い大学ということになっています。

ですが，州立ですから，カリフォルニアに住んでいる人に対してなるべく均等に教育を与えるという理念に沿っています。ですから，学部生はいろいろな人がいます。一生懸命勉強をしてやっと入れた，と言うと言い方が悪いですが，ここまで来たけれどもアカデミックな議論というのはあまりしたこともない，というような学生も来ます。それから，いわゆる2年制のカレッジに入って，そこから3年目で転入してきたという学生もかなりいます。

私はUCバークレーで学部生の授業を持つのがすごく好きです。なぜ好きかというと，みんなすごく一生懸命なのです。例えば，ハーバードとかスタンフォードとかへ行きますと，学部生というのはもっとお金持ちの人がたくさんいますが，カリフォルニア大学のバークレー校を見ますと，いかにも地元の人たちが一生懸命やってここまで来たのだ，ということが分かる学生が，学部生にはたくさんいます。大学院レベルになりますとアメリカ全土からリクルートしてきますので，かなり選び抜かれた人になっています。

バークレー校の人類学科というのは（スライド31），文化人類学，考古学，生物人類学，言語人類学と4部門ありますが，中心になるのは文化人類と考古です。生物人類学，言語人類学の人たちは，文化人類学のセクションか考古学のセクションに入って一緒に教育をします。

この写真は，5月に何人かの先生がretirementで退官なさったときのパーティーです。ちなみにカリフォルニアは，年齢制限による定年はありません。それは年齢による差別というふうに解釈されていまして，自分がここでやめたいとなったら自主申告する形になっています。

文化人類学の教員では，ランダムに写真を出しましたが（スライド32），私の好きなLaura Nader先生とPaul Rabinow先生という，この2人はどちらもアメリカで非常に名前の知られている先生ですが，Laura Nader先生というのは環境人類学について非常に優れた研究をなさっている方です。弟さんのRalph Nader氏というのは，政治家としても有名な方なので，名前を聞かれた方があるかもしれないです。

Paul Rabinow先生というのは，フランスのsocial theoryの大家で，フーコーの批判について非常に優れた研究をなさった方ですが，実際的な研究としても，今はbiologicalな研究が社会とどのように関わっているかというようなことをなさっています。

文化人類学といいましても，いろいろな先生，いろいろな分野の方がいるわけで，Medical Anthropology（医療人類学）というのは，人類学科の中でも独立の

博士課程を持っています。ここに Charles Briggs, Nancy Scheper-Hughes, Lawrence Cohen と 3 人書きましたが，この人たちは，医学部が充実している University of California, San Francisco の人たちと一緒に Medical Anthropology Program を持っています。それから，Linguistic Anthropology と Biological Anthropology は，先ほど申し上げましたように独立のプログラムは持っていませんが，このお二人，Bill Hanks と Terry Deacon という先生は，文化人類学のセクションの中でご自分の専門をなさって，大学院生の教育もしています。

先ほども言いましたが，バークレーにいて一番いいことは，全然縄文時代なんていうもの自体に関心もない人が，例えば私が狩猟採集民の小規模社会についてのメリットというものを考えたいという proposal（下書き）を書いて持っていきますと，例えば Bill Hanks, Linguistic Anthropology の先生が「どのぐらいの小規模だったら言語というものは保てるのかということを僕はずっと考えているんだ。でもそういう資料があまりないので，ぜひこういう研究をやってくれ」と言って，いろいろな助言をくれるわけです。そして，Terry Deacon という先生は脳の構造を研究なさっている方で，そういう意味では過去の資料を扱っているわけではないのだけれども，brain の evolution と人の考え方，それと archaeological なデータというものがどういうふうにつながっているかということをずっと考えている。そういったような視点から，いろいろな人がいろいろなことを言ってくれるのです。ですから，こういった人たちの前で半分でき上がった proposal のプレゼンテーションをすると，みんなで寄ってたかっていろいろな助言をしてくれて，あっという間に見違えるようにいい proposal になります。それはバークレーにいるメリットだと思います。

今度は考古学の教員（スライド33），ポストモダン系の先生から挙げますと，Ruth Tringham, Rosemary Joyce, Meg Conkey と，いずれもポストプロセスが90年代初め〜後半に出てきたときに，先頭に立ってその動きを進めた先生です。こういった人たちがうちの学科にはいます。下に書いた Laurie Wilkie，写真は手に入らなかったのですが，彼女は歴史考古学，非常に新しい時代の考古学，20世紀の前半ぐらいまでずっと扱う研究をしています。

もう少し生物人類，生態学系のほうの考古の研究といいますと，ここに写真のある Sabrina Agarwal というのは，これは Bio-Archaeology の先生で，この先生は骨の分析から骨粗しょう症とか，それが女性には多いとか，この集団では女性に特に多いとか，そういったような研究をしています。Steven Shackley というのは，土器とか黒曜石とかの成分分析をして産地を推定するといった研究をしています。Hastorf 先生はここに写真があります。彼女は植物人類学なのですが，彼女の理論的な立場はさっき見せましたポストモダン系の先生たちと非常に近いので，両方の橋渡しのような役割をしています。Kent Lightfoot 先生というのは，カリフォルニアの狩猟採集民の研究から始めましたが，native American の人たちと一緒に仕事をする中で，そういった人たちの視点を生かす研究ができるかということを考えています。最後，Patrick Kirch 先生。ハワイとかポリネシアの考古学をやっています。この先生は，80年代初めぐらいまで Ecology の先頭に立ってやっていた先生です。いろいろな立場の先生がうちの大学の考古学のプログラムにいます。

少し具体的な話をしますと，人類学科の博士プログラムというのは（スライド34），ほかの大学の幾つかでもそうですが，うちの大学は，人類学の修士課程は独立してはありません。ですから，大学院生というのは全部，博士課程に直接入っていきます。それで 1 年目の終わりに口頭試問をしまして，その口頭試問に通れば修士の学位を授与する。ただし，ほかの大学で修士を取ってきてからうちの博士課程に入ってくる人もいるので，そういう人は前に取った修士号のほうを優先します。各学期とも12単位が必修で，12単位といいますと 2 時間の授業が 3 つです。 2 時間といいますが，読む量はどんと出しますので， 3 つきっちりやったらもうそれだけで手いっぱいになるような量です。

カリフォルニア大学のプログラムの一番の問題は，カリフォルニア州の財政が厳しくなってくるにしたがって，授業料が非常に上がっていること。私が最初に96年にカリフォルニアに行きましたときには，カリフォルニア州の住民でしたら 1 学期に何百ドル， 4 〜 5 万円だったと思いますが，そのぐらいの授業料でカリフォルニア州の住民は誰でも行ける大学というはずだったのです。しかしこれが，州の財政の悪化に伴ってどんどん上がりまして，ことしで恐らく6,000ドルぐらいの額です。ですから， 2 学期， 1 年間ですと 1 万2,000ドル，大体100万円ぐらいの額を払わなくてはいけません。これはカリフォルニア州の住民ですから，州の外から来る nonresident は，これに nonresident tuition がかかります。これが同じぐらいかかりますので，外から来た人，特に外国人の場合には， 1 年間で授業料だけで200万円ぐらい払わなくてはいけないと

いう，非常に残念な事態が起こっています。

サンフランシスコの近くですから生活費も東京並みにかかるということで，実際問題として，アメリカ人の一般家庭の人で奨学金が取れないままでうちの大学院の博士課程へ来て 7 年なり 8 年なりの課程をやるということは，不可能に近いことになっています。これが非常に大きな問題になっていまして，実際には種々の奨学金を取れた学生さん，あるいはそれにプラスして Graduated Student Instructorship（GSI）と呼んでいるティーチングアシスタントの一種が取れる学生でないと，うちの大学院生としてはほとんど採れなくなっている。これが一番下に書きました，外国人の学生が非常に少ない，少ないと言いますのは採れないということで，これが東アジア研究全般にとって非常に大きな問題になっています。

プログラムとしては， 1 年目にまず理論と方法論のクラスを取って， 1 年目の終わりに口頭試問を受けて， 2 年目， 3 年目で博士論文を書く準備をしまして，普通にいきましたら 3 年目の終わりで Oral Qualifying Exam というものをする。ここで何をするかといいますと，自分の専門とする分野を 3 つ選んで，それに関する小論文を書く。それから博士論文の Proposal を書く。ですから，全部で 4 つのレポートを作りまして，これを口頭で defense します。この 3 つの field statements というのは，一般的には理論と方法論，それから専門とするエリアの 3 本が一般的なのですが, 人によっては理論 2 つですとか, 理論なのだけれども実際のアプリケーションも入れてとか，それから Settlement Archaeology がやりたいとか Bio-Archaeology がやりたいとか，そういったテーマ別に選ぶ人もいます。

これはアメリカでは一般的なシステムで，私，カナダのマギル大学に行きましたときは，Bibliographic Essay という言い方をしていましたが，やはり 3 分野選んで書く。私の場合は，Settlement Archaeology，狩猟採集民の考古学，それから縄文時代の考古学という 3 つでした。

大学としては， 6 年間でなるべく出ていただきたいと言いますが， 6 年というのはフィールドの調査を 1 年やった場合には厳しいので， 7 年はしょうがない。何か事情があると 8 年目までは我慢するけれども，そこぐらいまでには何とか書いてくださいということを基本にしています。

先ほど申し上げましたように，外国人学生は，自分の国から数年間にわたる奨学金をもらったといった特殊な事例でもない限り，現在は非常に採りにくいというのが実態です。これは非常に残念なことで，バークレーとアメリカでランクが大体同じぐらいのスタンフォード，イェール，ハーバードは，プライベートなところで 1 年目さえなんとか自分でカバーしてくれれば，外国人でもアメリカ人でも平等に採るということを今でもやっているのですが，バークレーの場合には「採っても後の見通しが立ちませんので，済みませが採れません」となってしまうことが非常に多いです。

必修科目としては（スライド35），最初の年に Anthropology の 229A と 229B，これが考古学の理論と方法論のクラスです。これは 1 学期ずつ，週に 2 時間の授業ですが， 2 時間で15週。ですからたいしたことないと思われるかもしれないですが，特にこの 229A というのは，読ませる論文のコピーだけで恐らくこのぐらいになってしまうので，学生たちはもうそれで手いっぱいです。 1 つの問題としては，これだけのものを読ませるとなると，最初の年に新しい外国語を勉強する時間がほとんどとれない。外国人の場合には言葉のハンディがある人をいきなりこれだけの理論のものを読ませるところに放り込んでしまっていいのか，逆に東アジア考古学をやりたいという人で，日本語をやりながらこれだけ読んでくださいというのも非常に難しいというところで，それも問題になっています。

もう一つ，うちの大学のシステムとしましては，oral defense までに自分の学科外の専門家 1 人を committee に加えてくださいと言います。その人を oral defense までに見つけてくださいということで，自分の専門以外の地域ないし専門，例えば考古学をやりたいのだけれども，古代の建築についてやりたいので建築学の先生に入ってほしいとか，そういった形で先生を 1 人決めます。ただ入ってくださいとお願いするわけにはいきませんから，授業を取ってその先生のやっていることを理解した上で，自分の専門とどう重なっているかを見極めて committee に入っていただく。

そのほかに，これははっきり必修とはなっていませんが，実際には取ってくださいと言っているのが，practical な method。例えば Paleoethnobotany という形で種（たね）の同定をする，GIS の使い方を覚えるといった形で，私の method としてはこういったものがありますと言えるものを 1 つ作ってもらいます。

3 年目の終わりまでに language exam で外国語の試験に合格してもらう。うちの人類学科では 1 つですが，歴史やほかのところでは 2 つやっているところも

あります。

ごめんなさい。先ほど言いました outside member のクラスというのはこちらでした。outside area といいますのは，例えばメソアメリカをやっている人でしたらメソアメリカ以外の地域のもの，ヨーロッパですとか，日本のことをやっている人でしたら近東の考古学についての知識を得ておいてくださいとか，自分の専門以外のところでよく知っている地域というものを 1 つ作りなさいというものです。

それから，先ほど言いました 3 つの field statements, 基本としては theory, method と area についてのレポートを書く。これはレポートと言っていますが，その分野で現時点で必要と受け入れられている，メインになる論文は全部網羅して，書いたテーマについては自分で授業ができるようにしてくださいということです。

そういう形で人類学科ではやっていますが，お聞きになって大体分かると思いますが，非常に人類学の理論中心の教育です。社会科学全般で今はそうだと思うのですが，area studies はどちらかというとアメリカ全体で劣勢です。area について幾ら知っていても，理論のところが弱いと学内で高い評価を上げられない。ですが，特にアジア研究，日本研究の場合ですと（スライド 36），やはり area というものを知らないままでいくら理論をやっても，実際問題としては非常にとんちんかんな研究が出てきてしまう可能性が高いです。

うちの大学には Institute of East Asia Studies というものがあります。ここは教育の面で合衆国政府からもしっかりした資金援助を受けていまして，非常に頼りになる存在です。そこのブランチとして，Center for Japanese Studies（日本研究センター）というものがあります。これはどちらも学内の Organized Research Unit と呼ばれているもので，学内を横断する組織です。Center for Japanese Studies の場合ですと，歴史学，美術史，考古，政治学，それからもちろん East Asian Languages and Cultures と言っています，実際には東アジア文学の学科なんですが，そういったところを横断する組織があります。ここが学生に奨学金を出したり，シンポジウムやワークショップをするときにはいろいろな手助けをしたりしてくれます。ですから，学生たちも日本についてやりたいという人は，なるべくそこに出入りしてそこのシンポジウムも行って，日本のことをちゃんと勉強しておいてねということは言っています。この Institute of East Asian Studies と独立組織なのですが，非常に近いところに Group in Asian Studies というものがありまして（スライド 37），これはアジア研究グループの修士課程を持っています。私のところでも，人類学であまり理論を教えすぎてとんでもない方向に行ってしまうよりは，まずここで MA を取って少し自分の研究テーマを決めてくれたほうがいいと思う学生さんもおりますので，そういうときにはまずここを受けてみたらどうかと勧めています。ここは日本語ないし中国語，韓国語，東アジアの 3 つの言葉のどれかを 2 年間で一応話せるようになるということをプログラムの requirement の 1 つに入れた上で，修士論文を書いてもらう。ここから，日本史と East Asian Language and Culture という department の博士課程には，進む学生がたくさんおります。

ここ自体も博士課程を持っていますが，社会科学の中でここの PhD を取ったということになりますと「あなたは Asian Studies の出ね」ということで，area studies ということで就職が非常に厳しくなるということがあり，実際問題としては，なるべく博士課程は social science の各学科に行くように勧めるようにはしています。

そんなところでちょうど 1 時間半たちましたが，あと東アジア考古学研究室の実際の活動を，これはさっきお見せしたスライドですが持ってきているのですが，かなり長くなってしまったので，この辺でまず質問などを。

司会：それでは，羽生先生に何か質問や感想などございませんでしょうか。

Q：よろしいですか。お聞きしていて, Anthropology 自体が，日本での Anthropology よりももっと広くて哲学的なことも入ってくるようなことだと思うのですが，私自身，いちおう古代哲学をやっていまして……。

羽生：お恥ずかしいです。私は聞きかじりなもので，そういう意味では非常に哲学的なものも入ってくるのですが，遅れて入ってくる。文化人類の場合にはそれがかなりきちんとした形で入ってきていると思うのですが，考古まで入ってくるときには，かなり単純化された形で入ってきているかなと。

Q：それはそれで，そんな難しい細かいところまでいってもむしろ逆に焦点がぼけてしまうかもしれませんが，お聞きしていて非常に幸いだなと思ったわけです。考古学が，大きい意味での Anthropology に入っているのが。今のご論文を拝見しても，Foraging Zone，Forager System と Collector System というものをきちっと捉えられた上で，それを細かいところまで応用してきちっとデータとの関係でやっていらして素

晴らしいと思いました。

羽生：ありがとうございます。

Q：それが 1 つの感想で，もう一つ，私はバークレーの Classics の Giovanni Ferrari，数年前に呼んでここで話してもらったのですが，

羽生：そうですか。

Q：そのときにバークレーの教育システムということで，集中的にとにかく書かせると。6 ～ 8 年で書かせて，博士論文を書かせる。日本の場合とは少し違うのです。いろいろな学会で発表させて，そしてその発表したものをまとめて 1 つの博士論文にするというふうになっています。私は John Ferrari がお話ししているときに，バークレーのシステムのほうが集中度が高まっていいのではないかと思ったのですが，そういうことについてどうお考えでしょうか。

羽生：ある意味で言いますとまさにおっしゃるとおりで，博士論文，1 つのまとまったものを最初から最後までつくり出す，無から有をつくり出すという作業が，非常に重要だと思います。特にうちのシステムの場合には，修士論文を書かないで入ってくる学生が半分ぐらいいますから，彼らにとっては 1 つのまとまったものを書く最初の機会で，その最初の機会を時間をかけてきちんとやらせてもらえる。それは，私のカナダのマギル大学での博士論文のときにも非常にありがたかったのです。ひと月に大体 1 chapter 書いて，それを committee の 3 人なり 4 人なりに全部回して，赤字がびっちり入ってきたのを書き直してという作業をやる。それが一つ一つの論文ではなくて本になるようなものを作るということです。ですから，それがきちんとできていれば，次に就職して Assistant Professor として入ったときに，Assistant から Associate に上がる一番の条件は，単著が出るかどうかというのがアメリカのかなりの大学で言われるのです。その単著が書ける基礎が博士論文でできている人は，そこが比較的すんなり通りやすい。それがない人ですと，単著が出なくて Assistant から Associate に上がれなかったという例は結構多いのではないかと思います。

Q：日本の場合，いろいろなところに論文を幾つか出して，それを方向性が違っていてもまとめ上げて博士論文にするような面もあるから，そのあたりどうかと思ってお尋ねした次第です。

羽生：あれはやはり，昔の博士号というのは非常に prestigious であった時代に，若いときからずっと何十年もかけてやってきた研究の集大成が博士論文というような，その名残なのでしょうか。

Q：そうなのでしょうね。

室長：そういう性格はあるでしょうね。

羽生：どちらがいいというのは言えないと思います。逆に，博士論文はいいが普通の論文が書けないという学生もいるわけで，それも困るのです。博士論文が出た後鳴かず飛ばずという人もいて，これはこれで困るので，私個人としては，大学は 6 年で出なさいと言っているけれども，何とか 7 年に延ばして，その間に 1 本でも 2 本でも雑誌論文も書いておいた方がいいよということは，うちの学生には言っています。

Q：ありがとうございました。

羽生：ありがとうございます。

Q：済みません。

司会：はい，どうぞ。

Q：私自身は専門は中国哲学で全く，なのですが，きょうは大変分かりやすく説明していただいてよく分かりました。ありがとうございました。

羽生：ありがとうございます。

Q：それで，アメリカの大学のこともほとんど何も知らないのですが，2 つ質問をさせていただきたいのです。大学院に入ったときに committee といいますか，その指導教員のメンバーが決まるわけですか。

羽生：うちの学科の場合には，入る時点でこの人に指導教員になってもらいたいという，願書を出す時点でこういう人と一緒に勉強をしたいという名前は書きます。考古と人類のほうでシステムが違っていまして，人類の場合には，その中でそれぞれの先生が，言い方が悪いのですが「私はこの学生が欲しい」という形で，1 人につき 1 人の指導教授が付きます。考古の場合は，1 人の学生に 2 人付くというシステムを取っています。私は，これはあまり良くないシステムだなと，実は思っています。

Q：他学部の先生も入れるというのは？

羽生：それは最初に指導教授を決めた段階で，committee を最初の 3 年間に組んでもらいます。committee を組むときには，指導教授と学科内の先生をもう 2 人，それから学科の外の先生を 1 人，全部で 4 人の committee を組む。この 4 人が field statement のそれぞれを担当してくれる先生であることが望ましいと学生に言います。

Q：もう一つの質問は，6 年ないし 8 年で博士論文を書き上げて終了した後の就職の状況はどうなっているのでしょうか。

羽生：厳しいです。厳しいですが，うちの大学は，恐らくほかの大学に比べるとまだありがたいほうだと

思います。ですから考古の場合には，今のところかなりの数で学生の就職が決まってはいます。ただ，これからますます厳しくなる。

1つには，就職状況が厳しくなった時点で，うちの場合には大学院生を採る数を減らしました。funding がないということもありますが，採っても就職が見つけられそうな学生に集中する。これは，本当は採ってあげたいけれどもこの学生は就職できるかなという場合にはちょっとそこで考えようと，考古の先生たちは10年ぐらい前からものすごく採る数を減らしています。

文化人類の先生たちはそういうことをしないで「これは教育なのだ。職を見つけるためのものではない」という立場を貫いていらっしゃるので，もっと自由放任主義で，学生たちも好き勝手をやっています。そのかわり就職できない学生も多いです。どちらがいいのかというのは一長一短で，私は文化人類の先生たちのやり方のほうがいいと思うのですが，実際問題として就職できなかった学生さんたちの話を聞いていると，なかなか大変だなと。

Q：そうですよね。ありがとうございました。

羽生：はい。

司会：ほかに。

Q：学生の定員というのは，それぞれの学部，学科で決めることができますか。日本だと文科省に問い合わせて認可されなければ決められません。

羽生：定員ですか。

Q：ええ。

羽生：定員は，大学のほうから，ここまではとっていいという枠があります。それは教員の数と学部生を教えている数によって，数年ごと，毎年変わってくるのかな，一応，今年はここまではとっていいという枠は，毎年示されてきます。

Q：ここまでというところよりも少ないのは自由に決められるわけですか。

羽生：そうです。

Q：日本の大学だと，これだけとらなきゃいけないという，

Q：結局私立だからですね。

羽生：いや，公立です。

Q：公立。

羽生：公立ですから逆に，採って奨学金が出せないのは非常にまずいので，基本としては，採ったからには何らかの形で funding を見つけてあげると。全部は出せないけれども，暮らしていけるだけは面倒を見るのが前提になっていますから，それができない学生は採らないというのがみんなの了解事項になっています。ただもちろん，全然採らないのが何年も続いて大学院生の数がものすごく減ってしまうと，学科の予算に最終的には響いてきます。去年の場合ですと，うちの学生は採り過ぎてもう funding がないから，大学院生は1年採るのをやめようという内部の申し合わせが，考古の場合できたのです。ですがやはり本当に採らないということになりますと「それは困る」という先生も現れて，採らないという内々の agreement だけれども，採ってはいけないという規則ではないので採るという先生が現れまして，あの先生が採るのだったら私も採りますという人が現れて，結局3人採ることになりました。

普段は10人の教員に対して7～8名です。それが，私が最初に行ったときは，8名の教員に対して10名ぐらい採っていましたから，明らかに数は減っています。ただ，結局うちの場合ですと，何人採ったかではなく何人 PhD を出したかというのが最終的な評価になります。大学院の個々の授業は学生が最低4人必要なのですが，大学院の授業でも学部生も取れますので，4人の定員割れになってしまうとまずいですが，定員割れにならない限りは問題がないです。

司会：よろしいでしょうか。

Q：いいですか。大体1年に1人入ってくるとすると，1人の先生が大体，もしも6年間だとすると7名ぐらいの学生を。

羽生：実際にはそれだけ採ってないです。専門にもよりますが，私の場合ですと，今のところ2～3年に1人です。でもそれは東アジアという専門の問題もあります。私も教授になったところで，少しこれは考えを変えなくてはいけないと実は思っています。東アジア，日本の考古学という形でリクルートをしても，言葉をやってもらわなくてはならないという制約，それから外国人が採れないという制約があると，中で生き延びていくのは非常に難しいです。実際に採っても，日本をやりたいといって来たけれども違うテーマに転向してしまう学生も出るわけです。だからそういう意味では，毎年採ってもそれだけ就職させられそうな学生がいるかどうかです。基本的には，私の同僚の中で半分ぐらいは，2年に1人採れればいいかなと。

特に考古の場合ですと，Co-Advisor System というものを採っていますから，自分の学生にも必ず Co-Advisor が付く。書類の上ではどちらが Main Advisor か，採るときには明記しないのです。最終の博士論文

を書くところになって，主査と副査になりますが，それまではどちらも Co-Advisor という形で最初の数年は教えますので，私の場合ですとカリフォルニアの狩猟採集民の考古学で博士論文を書いた学生の Co-Advisor として教えるということもあります。

司会：ほかに何かございませんでしょうか。

先ほど先生がバークレーに行ったことがありますかと聞かれたときに，一番奥の列の一番左側の方が手を挙げていましたが。

羽生：あ，すいません。

司会：日本文学か何かの大学院生です。バークレーの図書館か何かに資料調査に行かれていたのですね。

羽生：そうですか。新しい図書館ですか。

Q：そうです，C. V. Starr East Asian Library です。

羽生：では，最近ですね。

Q：はい。名古屋大学文学研究科のグローバル COE の大学院生派遣事業というのがありまして，私も援助をいただいて 1 カ月間調査に行かせていただきました。ただ本当に，私は図書館にこもっていた状態でいたので，実情は全然分からないのですが，ちょっと今日はお話を伺いたいと思いまして。

羽生：うちの大学は East Asian Languages and Cultures という学科がありまして，これは少し前まで East Asian Languages と言っていたのです。一応最後に Cultures を付け足しましたが，実質的には文学の学科です。ここの先生，例えば Mack Horton という先生知っていますか。

Q：はい，お名前は。

羽生：彼は連歌の専門ですが，恐らく私より上手な日本語をしゃべる先生です（笑）。前に網野善彦先生にバークレーに来ていただいたときに一緒にお話を伺ったのですが，完璧な敬語をしゃべっていました。

Q：今後お会いできる機会があればと思いますが。

羽生：そうですね。ぜひ来ていただけると。

先ほど言いました，Institute of East Asian Studies，これはシンポジウムをやったときのものです。ここが title 6だったかな，研究ではなくて教育用の大きなファンドを持っているのです。それで日本研究，中国研究，それから Korean Studies の 3 つについて，かなりいろいろな支援をしてくれます。ここのイベントというのを見てみますと，9 月のイベントがもうここに出ていますが，これは Chinese 関係がちょっと多いです。Japanese Studies がまだ出ていませんが，毎月 1 ～ 2 回は Center for Japanese Studies が似たような形でコロキアムをやっています。たぶん担当の事務の方に「メーリングリストに入れてください」とメールを 1 本送ればやってくれるはずです。担当の方は日本人のクミさんという方ですから，ぜひコンタクトしてみてください。

Q：はい。

羽生：Center for Japanese Studies は結構いろいろなイベントをやっていますし，こういった発表をしたいけれどもということを半年ぐらい前にご連絡いただければ，セッティングはできますので，ぜひ皆さん来ていただければと思います。少し早めに言っていただければ，飛行機代ぐらいは出せるかもしれません。

司会：（笑）それは大きな魅力です。

羽生：はい（笑）。

Q：後輩たちにも伝えておきます。

羽生：ぜひ。

司会：いま彼女が横で手を挙げかけていたので，質問があるかもしれません。

Q：失礼いたしました。日本文学の研究が中心ですが，サンタバーバーラ校を卒業して，ロサンゼルス校で修士を修了してきました。授業について質問したかったのですが，Anthropology229A・229B の授業の内容を具体的に，考古理論と方法論……。

羽生：229が考古理論で229B が方法論です。

Q：そうですか。

羽生：229A というのは，15週の最初の 6 週は考古学の歴史，1900年代の初めからプロセス考古学，ポストプロセス考古学，それから今の考古学のメインになるトピックというのをまずカバーします。その後は，教えている先生によって好きなトピックを教えていいということになっていますが，実際にはかなりポストプロセスに偏っていて，正直言うと，私はそのプログラムは不満なのですが，今年で Margaret Conkey 先生と Ruth Tringham 先生と 2 人，ポストプロセス系

の先生がリタイアなさるので，その時点で恐らく組みかえることになると思います。教える先生にかなり裁量が任されるように変えようという話は，若い人たちの間で今しています。シラバス自体はたぶんウェブのどこかに出ていると思いますが，email をいただけたらお送りできます。

Q：ロサンゼルス校の East Asian Languages and Cultures の科目ですが，そこでは名古屋大学の院生発表のようなものはないのですが，それはバークレー校にはあるのですか。

羽生：院生発表という形ではありません。229A の場合ですと，例えば今週はこの12本の論文を読もうと，12本を学生たちに割り当てて，あなたはこれにコメントをしてくださいというように，担当はざっと決めておきます。ただ，担当でないから読まなくていいというわけではなく，結局12本読んでこないと説明できないので，そういう意味では，自分の発表というよりもディスカッションのテーマを提供する形になります。

それと別にうちの場合には，Archaeological Research Facility という，それも East Asian Studies と似たような学内の Organizational Research Unit なのですが，そこが非常に考古学のプログラムと近い関係があり，水曜日ごとに Bag Lunch Talk（お昼のランチトーク）があるのです。お弁当を持ってきてよくて，みんなが 1 時間の発表をします。そこで学生たちが自分の研究について発表することは多いです。

Q：今彼女が言った院生発表というのは，先生方 4 名ぐらいが出てくださって，あと院生全員が出て，1 週間に 1 人ずつ発表していくもので，1 人のテーマについて出席している学生も先生や仲間の発言を聞けるという場なのです。

羽生：ゼミみたいなものね。

Q：そうです。ただ，ゼミは先生 1 人対複数の学生ですが，同じコースの先生たちが皆さんで評価をする。今おっしゃっていた Bag Lunch Talk というのは，先生方も当然お見えになりますか。

羽生：はい，行きます。ですから機能としては同じですが，学校の単位にはなりません。が，Archaeology の場合には，oral defense の前にたいていみんな 1 回やって，卒業する前には Archaeological Research Facility からファンドをもらった場合には必ずプレゼンテーションをすることになっていますので，実質的にはそこでプレゼンテーションをしないと卒業するのは非常に難しいシステムになっています。ただ，もう少しゼミみたいなシステムとしてつくるほうがいいという気はします。

Q：以前は単位はいただけていなかったのですが，先生方のご配慮か何かで授業になったという経緯があるようです（笑）。

羽生：先生方「へ」のご配慮かもしれません（笑）。

司会：後者だと思いますが（笑）。

羽生：しまった。録音しているのでしたね（笑）。

Q：私は，カリフォルニア大学ロサンゼルス校に行ったときに，修論のかわりに 3 つの論文を出しましたが，コメントはあまりもらえなくて，問題のところがはっきり分からなくて，最後までにもうちょっとコメントもらえればいいなと。で，日本に来るとこういう制度があったのでよかったです。

羽生：UC System 全体が，学生が多すぎると思います。それは特に，やはり今，州の財政が厳しくなってきているのと，大学院生自体ももともと多いところで，確かに減らしてはいますが，UC というのは全体として仕事の量がものすごく多いです。それはアメリカの大学のほかと比べて，と言ってもほかはよく知っているわけではありませんが，やはり少し多いとうちの学校の先生たちもよく言っています。

そういう意味で，私はマギル大学ですごく幸せだったのは，学生が少なかったのです。それこそ，1 年に学科で考古の院生は 1 ～ 2 人で，私の博士論文は，Committee の 3 人全員にきっちり読んでいただいて，誤植から何から全部見ていただいて，文献リストまで proofread していただいて，揚げ句の果てには「遺跡というのは site だね，君」とか，そんなところまでじっと見ている。さっきの Trigger 先生ですが。こんな有名な先生に誤植まで見ていただいたと，そういう意味ではいいところ悪いところを取り混ぜてあるので，有名な大学だからいいということは必ずしもありません。UCLA と UC Berkeley は，恐らく UC の中でも先生たちが一番忙しいところだと思います。

司会：よろしいでしょうか。

Q：はい。ありがとうございました。

司会：どういたしますか。ここで休憩を取りますか。

羽生：そうですね。はい。

司会：その方がよろしいですね。では，ここで 5 分間ほど休憩を取らせていただきたいと思います。

羽生：あとはスライドショーのような感じで，こんなことをやっていますよということを見ていただければと思います。

（休憩）

司会：それでは皆さん，済みませんが再開させていただけますか。

羽生：そうですね。お忙しいと思いますから。

そうしましたら，今お話したようなところと関連して，では実際にうちの研究室でどんなことをやっているのかを簡単に見ていただければと思います（スライド38）。これはさっきみたいな堅苦しい話ではないので，スライドショーと思って気楽に見ていただければありがたいです。

私，定住度とか生業の多様性という研究をしていますが，一番考えたいのは，環境と人間との相互作用。いろいろな矢印がいっぱいありますが（スライド39），これと環境とがどう関係しているのだろう。環境が人間の生活を決めるのではなくて，人間の活動が環境に影響を与えるということもある。最たるものが今の地球環境問題を考えるときにもいろいろ関係してくるだろうと思います。

先ほど言いましたように，最初からこんなことを考えて研究を始めたわけではなくて，考古学を研究しているうちに，こういったいろいろなつながりがあるというふうに見えてきたのが，正直なところです。私の専門としている縄文時代，旧石器時代から沖積世の前半ぐらいまでのあたり，1万年ちょっと前ぐらいに何が起こったかというと，うんと大ざっぱに言いますと（スライド40），もともと大型動物の狩猟をしていたのが，中型から小型の動物に狩猟の対象が変わって，それと同時に植物とか魚を捕る量が増えてきた。もし人口が少ない場合には，大きな動物を1回捕ると非常に効率がいいですが，人口が増えてくると，大きな動物だけ捕っていたのでは食べ物が足りない。そうすると，たくさんの人口を養うためには，どうしても中型の動物を捕り出したり，植物に食べ物を依存したり，そういうほうにだんだんシフトしなくてはならなくなったというのが，考古学者のうんと大ざっぱな理解なのですが，まず本当にそうなのかという疑問があります。大型の動物を捕るのは本当に効率がいいのか。その辺でさまざまなディスカッションがありますが，考古学の資料からみる限りでは，1万年を境にして，植物，魚，それからもうちょっと小さな動物を捕っている量，割合というのは，確実に増えています。

もう一つ，縄文時代，狩猟採集民といいますが，どこまでが狩猟採集でどこからが食料生産なのか。この線を引くのは非常に難しい問題で，かなり大きなグレーゾーンがあるのです。60年代ぐらいまでは，植物

栽培の仕方が分かった途端にみんな農業を始めた，それまでは知らなかったのだと思っていた人がかなり多かったと思いますが，どうもそうではなくて，栽培すれば植物が育つということはみんな知っていた。実際に少しはやっていたのだけれども主食はそこからもらっていなかったというのが，どうも縄文時代ではないか。

それで考えると，植物を栽培するということの意義，それからどういうときに主食を栽培するように変わるのか，そのメカニズムをもう一度見直す必要があるというのを，いろいろな人が言い出しています。それと関連があるのは定住度の問題，生業の多様性の問題。大型動物から中型動物，植物，魚まで食べるようになった。これだけ見ますと，植物まで入れることによって食べ物の幅が広がったと考えることは可能です。でも逆に言うと，これが起こった段階で，主食の比重が植物のほうにぐっと偏ってしまった。そうすると，それまでいろいろなものを少しずつ食べていたのが，主食が出てきて植物主体の食べ物になっている。そういう意味で言えば，食べ物の幅は狭くなったとも見られます。

これは現代の問題を考えるのに非常に重要な問題で，いま生物多様性とか食の多様性とか，ニュースにいっぱい出ていますが，今の食の多様性は幅が広いのか狭いのか，これは考えなくてはならない問題で，例えば新幹線に乗って東京から京都まで行きますと「30品目入っているお弁当」といって売っていますよね。あれは5年ぐらい前までは売っていなかったわけで，これが食べられるようになって日本人の食の幅は広がったのか，それともそんなことをしている一方で，昔いろいろなものを食べて雑食性だったのが，実はものすごくみんな同じものを食べるようになっているのではないか。例えば，お米にしても一昔前まではお米の

中のいろいろな種があったのだけれども，今は90何パーセントまでコシヒカリとその親戚になってしまっている。そういう意味で，多様性というのは両面があるわけで，そういったことを考えるのに考古学の資料は非常に大事なのではないかと思っています。

その多様性で，generalist と specialist と言うと分かりやすいと思いますが，generalist はいろいろなものを食べている人，specialist は食物の幅，生業の幅が非常に狭い人というふうに考えてもらえばいいと思います。これは実は，定住度と非常に密接な関連があって，いろいろなものを食べている generalist というのは（スライド41），この☆になっているところがそれぞれの集落なのですが，集落の周り10キロ圏ぐらいまでのもの，歩いて大体2時間ですが，毎日そのあたりの食料を採集して，周りがなくなったら次の集落に移る。これを1年間ずっとやって暮らしている人というのが，狩猟採集民の間では，民族誌を見るとたくさんいます。これは generalist という言い方もしますし foragers という言い方をすることもありますが，名前は何でもいいのであって，つまりは周りにあるものだけ食べて次に動く。結果として移動の回数は増えますが，ある意味で言えば効率がいい。周りにあるものだけ食べているから遠くまで行かないでいい。周りにあるものだからいろいろなものを食べている。

これがもうちょっと定住度が高い狩猟採集民を見ますと（スライド42），1カ所に長くいるということは，それだけそこに食料を運び込まなくてはならないということでして，これの例ですと，冬には大きな集落をつくって，ここに食料を貯蔵する。遠くまで行ってたくさん食べ物を採って，それを持って帰ってくる。こういう生活をしていると，メインになる集落を動かす回数は少なくなって定住度は高くなりますが，効率がいいかというと難しい問題で，大きな集落はつくれますが，これをする分労働量は増える。貯蔵するという手間もある。貯蔵するということは，たいていいろいろなものを少しずつ貯蔵するのではなくて，かなり限られた種類のもの，例えば縄文時代ですと恐らく木の実とかが対象になっていたと思うのですが，食料の幅を狭めてたくさん採って，ある意味での intensification を行う。

これが狩猟採集民の2つのパターンだと思うのですが，縄文時代では恐らくこういった変化というのが，縄文時代の前期と呼んでいる時代，7～5千年ぐらいまでの間に起こったのだと思います（スライド43・44）。

これをどんどんやっていくとどうなるかというと，数理的なモデルでは，短期間にはたくさんの人口をサポートできますが，食料の幅をうんと狭めてしまうとバックアップがなくなる。1つのシステムがうまくいかなかったときにほかのシステムがない。そうすると，1つの食べ物に依存していてうまくいかなくなったときに，それの population をサポートできない。そこで，短時間での人口の減少とか，極端な場合でいうと，文明の崩壊と言われているような減少が起こるのではないか。それが起こったのは恐らく，これは縄文時代の人口の推定，小山先生という民族学博物館の名誉教授の方が昔なさったお仕事なのですが，遺跡の数から人口を推定しているので実際の数は必ずしもあてになるとは思いませんが，大体のパターンというのはこんな感じだろうと（スライド45）。これで見ていただくと，縄文時代中期と呼んでいるのは，終わりが大体4,200年ぐらい前だと思うのですが，ここから後期というところにかかって人口ががたんと減っている。ここからここに上がったのは，恐らく食料に主食ができて，食料の幅が狭くなったけれども人口をたくさんサポートできるようになった時期。このがたんと落ちているのは，そのシステムがうまくいかなくなった時期，あるいはうまくいかなくなっただけでなくて，意図的にこういうことはやめようと思ってまた多様な食生活に変わったという可能性もありますが，何にしても，そういったものと対応するのではないかということを考えています。

これは私が考えついたことではなくて，縄文時代中期というのは，植物質の食料のほうにうんと偏った時期ではないかということは，今までいろいろな方がおっしゃっています。ただ，大ざっぱな話というのは，各地のデータで見ていくと，当てはまる地域，当てはまらない地域があります。関東と東北でも違いますし，個々の事例を見ていかなくてはなりません。ここから上がるところ，それから下がるところがどういうメカニズムで起こったのか，それが現代の環境問題を考えるときにどういう意味があるのかを考えたいというのが，私の研究の主目標です。

そして，先ほど質問のあった三内丸山遺跡というのは東北にあります（スライド46）。縄文時代で一番大きな遺跡ということになっておりますが，ものすごく複雑な遺跡です。これは94年当時の様子ですが，野球場を建て始めて，結局この野球場の予定地全体が縄文時代の集落で，実はその先まで集落が延びているということが分かって，国の指定の遺跡になって野球場

の建設は中止になりました。1,500年以上にわたって縄文人が定住した縄文文明の跡であるということで，90年代後半にはテレビの特集がいっぱいありましたが，非常に難しい遺跡です。まず一つ考えていただきたいのは，今から1,500年前といいますと古墳時代ですが，古墳時代から今までと同じだけの時間，この場所に人が住んでいたとなりますと，その1,500〜1,600年なりの間，同じことをしていたとは考えられないわけで，この日本列島でこれだけの面積のもので同じ規模の集落，古墳時代から今にわたるまでこれだけの大きさの村というのが日本の中であるかといったら，恐らくほとんどない。小さな村だったらあるかもしれないが，それでもやはりその村なりにいろいろな変遷があっただろう。三内丸山にしてもまさに同じことが言えるわけです。これは縄文時代の土器の編年で（スライド47），円筒下層のA式と呼んでいる，大体5,900年〜4,300年前よりもう少し後までいくのかもしれないですが，これだけの間，土器の模様にすると12段階にわたるものがある。Cal というのは較正年代ということです。

こういった枠組みで住居の数を数えてみると，三内丸山遺跡はすごく大きな遺跡だと言われていますが，最初の頃は住居が10軒もないのです。前期の終わりあたりで20軒くらいまで増えて，ここで一度がたんと減って，中期の半ばぐらいのところでわっと数が増えて，この増えたところでも70〜80軒という感じです。

しかも増えたときには，ここにちょっと写真がありますが，住居がすごく小さいのです。ここですぐまたがたんと減って，ちょっと上がってまた下がる。これはもちろん時期の分からない住居というのもありますから，絶対数だけ見ると必ずしも当たっていないかもしれませんが，さっきの人口推定と同じで，上下というもののパターンは大体こんなものではないかと思います。そうすると，縄文時代中期の人口がわっと増えた前に，一度ここでがたんと減っている時期があって，そこで生業もがらっと変わってわっと上がって，それでまたがたんと下がったのかなという感じがします。

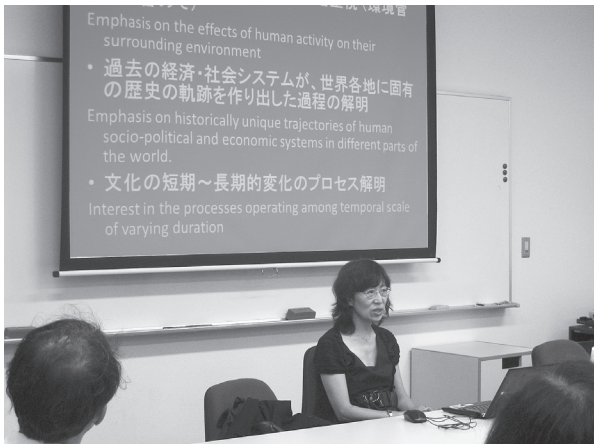
三内丸山で面白いのは，一緒に出てくる，石器と呼んでいる石の道具がいろいろ変わるのですが（スライド48），最初の頃は stemmed scraper，石さじと呼んでいますが，石のナイフみたいなものがすごく多いのです。これの後に石鏃（せきぞく），矢尻ですとか磨石（すりいし）と呼んでいる丸っこい川原石みたいなものです。植物質の食べ物をすりつぶす道具といわれていますが，これが出てくるようになります。縄文時代中期の一時期しかほとんど出ないというのがあります。それが急にがらっと変わって，石の矢尻だけがたくさん出る時期が最後のところにあります。しかも面白いのは，磨石メインから石鏃メインへの変化がすごく急に起こって，その変化が起こるのがこの段階，住居の数が減る前の段階に石器の組成は変わっている。石器というのは，普通私たちは食べ物のプロセス，生業活動と直接的な関係のあるものと思っていますから，これを素直に読むと，まず生業が変わってそれから集落の規模が小さくなったと読めるのではないか。

もう一つ面白いのは，この遺跡では土偶と呼んでいる土のお人形がたくさん出ているのです。お祭りの道具だといわれていますが，これがここまでたくさんあるのが，ここでがたんとほとんどなくなってしまう。このタイミングというのが，住居ががたんと減るタイミングと一緒になっている。これを素直に読むと，まず生業の特徴が変わってそれに伴って集落の規模が縮小して，それと一緒にお祭りのパターンも変わったのかなと思います。

この住居の数が減るというのは前もいろいろな方がおっしゃっていて，それについて気候変動，気候が寒くなったから三内丸山は崩壊したのだとおっしゃっている先生がたくさんいます。うんと大ざっぱに見ると（スライド49），確かに気候が寒くなったのと住居の数が減って遺跡が最終的に放棄されたタイミングというのは大体合う感じがしますが，寒くなったのが先なのか住居の数が減ったのが先なのかというところは，本当はまだよく分かっていません。図で見ると，この赤い線が気温の変化を示している ice core のデータなのですが，ここのところでがたんと下がっているのが4,200年ですから，それより少し前に起こっていて，この線になっているのが三内丸山から得られた年代測定のデータなのですが，大体その辺と一致するという感じはします。でも，数が少ないので，今の段階では何とも言えないのが正直なところです。それと，気候が寒くなったから人が住まなくなったというのは，これは全然説明になっていないわけです。この時期2度ぐらい下がったらしいのですが，2度下がっただけだったらいったい何が起こるのだろう。1つ言われているのは，今クリの実がたくさんなる北限が仙台ぐらいなのだそうですが，2度高かったらそれが青森ぐらいまで行く，それがまた南下したからだということをおっしゃっている先生もいますが，その辺のところはま

だはっきりしていません。先ほどの石器を見ますと，石器からみた生業の幅が狭くなってきたのと集落の規模が小さくなった関連がある可能性が非常に高いというふうに，このデータで見ていますが，まだほかのいろいろな資料と付き合わせてみないとはっきりは言えません。そういう意味で，今いろいろな資料を付き合わせながら仮説を立てて，この仮説を検証するためにはどういったデータが欲しいかということを探している段階です。

もう一つ大事なのが，ここの中期はじめの段階です。いったん青森の三内丸山遺跡でも住居が減っているし，青森全体で住居の数がすごく減る時期というのが5,000年前後にあるのですが，この時期にいったい何が起こったのだろうということが気になっていまして，それを考えるために新しく始めたのが，合子沢松森遺跡の発掘です（スライド50）。これは縄文時代中期初めの遺跡で，住居と，これがその時代の貯蔵穴で，恐らく食べ物を貯蔵したところといわれていますが，実際にどういうふうに貯蔵したのかということは，正直言ってよく分かっていません。ただ，こういった遺構を発掘すると非常に便利なのは，それが廃棄された後でごみためとして転用されるのです。この中からもごみためとして使われたときの廃棄物というのがずっと出ていまして，その中から植物の種，木の実といったものが出ている。それで見ると，どうもこの遺跡というのはかなり特殊な使われ方をした遺跡で，種の組成を見てみると，漆など限られたもの，あとはクルミといったものしか出ていない。そういったことから見ていくと，この時期の遺跡間の違いを見ることによって，その集落のパターン，居住の定住度，それから生業の幅を考える手掛かりになるだろうと考えて始めた発掘です。これは去年の夏で発掘が終わりまして，今年もう一度青森に8月1日から行って，発掘したものの整理作業をすることになっています。



まとめますと，バークレーの青森のプロジェクトというのは（スライド51），生業・集落・社会の長期変化のメカニズムということを考えるために，定住度，生業の多様性，それから環境の変化というデータが必要。それを考えるに当たって，環境が変わったから生活が変わったというだけではなくて，人の生活がどのように変わったか，その結果として周りの環境にどういう影響を与えたのか，それが現代の環境問題を考えるときにどんな役に立つのかということまで考えてやりたいというプロジェクトです。これはもちろん青森のことだけではなくて，狩猟採集民研究ということを考える場合に全般的に言えることで（スライド52），考古学と民族誌から見た人間と環境の相互作用，それをいろいろなレベルでの時空間スケールで考える。そういったことを考えると，先史時代から現代に至る狩猟採集民文化の盛衰とそのメカニズムを世界の各地で考えることができるだろう。そういった過去からの教訓が，現在直面する課題に対してどういう意味を持っているのかを考えることによって，環境人類学の一分野としての狩猟採集，環境管理の研究ということができるのではないか。こういうことを考えながら研究してくださいとうちの学生には言っています。

言っていながら私，本当にどこまでできるのだろうということをずっと考えていたのですが，やはり3月の震災の後なんかで，環境の長期変化ということを考えることになりますと，考古学の貢献できることは実はもっといろいろあったのではないかということを，ここ数カ月，また新しい目から考えるようになりまして，1つは，考古学の人たちが震災の後で気がついたのは，例えば遺跡の分布，縄文時代の遺跡はなぜ高台にあるのだろうというのは「なぜだろうね」とみんな顔を合わせて答えがなかったのですが，今度の震災で，考古の遺跡は津波から逃れたところが非常に多かった。これはやはり，少なくとも今遺跡が残っているところはそれと関係があるのだと。ただ，逆に言うと，津波で被害に遭うような遺跡はなくなってしまったという言い方もできるわけですから，縄文人は賢くてそこにはつくらなかったとまではまだ言えないのですが，遺跡の分布と長期的な視点というのは，いろいろな意味から貢献できるのではないかと思います。

考古学の可能性と問題点ということで（スライド53），可能性としては長期的な変化の研究が可能である。それから，人々の具体的な生活にミクロなレベル

でアプローチできる。けれども問題点としては，物質文化から，人間の行動だけでなく考えていたこと，文化，社会まで論じなくてはいけないので，両者をつなぐモデルがどうしても必要になってくる。モデルをつくるところでどうしてもたくさん仮定が入りますから，結果として出てきた結論は絶対的なものではなくて，どんどん変わっていくのはある程度宿命として仕方がない。

今まで現代社会との関わりに関する議論というのが不足していたところがありますが，これから考古学者というものは，そういったものを考えていかなくてはならないのではないか。それがポジティブな面ではいろいろな研究者とのつながりにもなりますし，逆にそれができなかったら，今まで非常に人数が増えてしまった日本考古学は，研究者の数を縮小することはやむを得ないのではないかなと思います。そういう意味で，考古学というものが何ができるか，何が必要か，それから社会科学の全体の中で考古学はどういうことをやっていくのかということを，もう一度考え直す時期に来ているという気がします。

まとめ（スライド54）。次世代育成の話。今日のまとめになりますが，最初にお話した，データの取得解釈と理論的議論のバランスが非常に大事。それから2番目に，学問全体に対する長期的なインパクトを考えてほしい。3番目に，国際的な学問の流れを考えながら研究の枠組みをつくってほしい。学際的な研究が大事。社会の中での考古学の役割。

それから，私の個人的な研究の関心としては，地球環境問題へ貢献できる学問だと思っています。ただ，それをやらなくては考古学ではないというわけではなくて，そういうことを考える先生がいてもいい。逆に考古学のうんと細かいところを見て，昔の人たちの，この一人の人が何をやっていたという研究をする人がいてもいい。それは研究者個々人でどういう問題を設定するかということですから，これだけに限るということではありません。そういう意味では，いろいろ幅のある学問なのですが，仮定がいっぱい入ってくるため他の研究分野の方には分かりにくいところもあると思うので，その透明度をいかに上げていけるかということは大事だと思います。どうもありがとうございました。

司会：羽生先生，どうもありがとうございました。今のこのセッションのところ，最後の東アジア考古学研究室の活動のところで何か1～2，質問をお受けしたいと思うのですが，何かございませんでしょうか。

Q：いいですか。1つだけごめんなさい。途中でちょっと退席して。直接そこだけに関わるわけではないのですが，日本考古学に対するアメリカ人学生の関心はどういう感じなのですか。

羽生：縄文というのは土器を持っている狩猟採集民ということで，70年代ぐらいから結構いろいろな先生が紹介してくださっているので，狩猟採集民をやりたいと言ったときに，今まで北西海岸の狩猟採集民をやっていたのだけれどもぜひ縄文をやりたいという学生は，結構ぽつぽつ現れます。ただ，日本語ができてそれをやりたいという人は非常に少ない。そこで「言葉はバリアーにならない」と言いましたが，大学院生の場合には非常にバリアーになります。それをどうかいくぐっていくかというのは，正直言って私もまだ試行錯誤の状態です。頑張って伸びそうだなという学生はアジア系の人です。Japanese American とか韓国から来た人ですとか，日本語ができなくてもある程度日本考古学の枠組みのようなものがつかみやすい人。それが果たしていいことなのか，それともそういうことを知らないでも日本語学をやって，全く的外れのようだけれども結果として20年後の学問に対するインパクトが出る研究ができるか，その辺の判断はまだ私も試行錯誤の状態です。

Q：青森プロジェクトのようなものがもっと増えれば，実際に日本で発掘などに直接携われる……。

羽生：そうですね。結局うちのプロジェクト以前には，Gina Barnes 先生が奈良で発掘したのがほとんど唯一の例だと思います。あれはかなり層位を，私たちは発掘で文化層という言い方をしますが，土をそれぞれ見ながら掘ります。アメリカの場合には，それを5 cm ごとに一律に掘る。それで上の方が下より新しいという理論で掘る先生は結構いるのです。うちの発掘の場合にはそれを両方取り入れて，文化層なのですがサンプルの一部は5 cm カットでとるというやり方をしたのです。

バーンズ先生は非常にアメリカ的な，イギリスへ行かれましたが，もともとアメリカでトレーニングを受けた方なので，アメリカの新しい方法を日本考古学に持ち込むという意気込みで発掘なさったと思うのですが，結果としては非常に抵抗のある日本の方も多くて，ディスカッションもうまくかみ合わなかったと伺っています。

これは非常に難しいところで，まず一つは，やはりアメリカなりイギリスから来る人が持ち込み方を改めなくてはいけないと思うのです。アメリカ・イギリス

のほうがいいというのではなくて，こういうやり方もあると。で，「やってみよう」というプレゼンの仕方が恐らく最近まではできていなかった。それともう一つは，日本の先生方としては，逆に，今までこういうふうにやってきたのだけれども新しい方法でやってみようというときに「今までのことが分かっていない人は話にもならない。まず勉強してからいらっしゃい」という先生がほとんどだと思うのですが，それはやはり違う文化，違うバックグラウンドで育ってきた人ですから，それを両方やってくださいというのは実際問題として不可能ですし，非生産的だと思います。その辺のところはケース・バイ・ケースなのですが，両者の歩み寄りが必要という気がします。

司会：ほかに何かございませんでしょうか。

Q：なかったらよろしいですか。同じようなことは，例えば中国学に対する外国の学者とのいろいろなことで感じます。私の指導教授でもあったケンブリッジのGeoffrey Lloydが，日本にやってきて中国の学者たちとディスカッションをしたときに，やはり全体的なAnthropology的なところがある枠組みのあるアプローチですよねと。もっと考証学的な部分のアプローチのギャップの問題は，その場にいて非常に強く感じたことがあります。

羽生：そうですね。恐らく日本で国際交流と言っている場合に，どの分野でもそうだと思うのです。それは社会科学だけではなくて，例えば形質人類学の分野でも，アメリカで新しい方法というのはどんどん出ていますが，それをやらせてくださいと日本の先生方にお願いしたときに「いやあ，アメリカ人のサンプルの扱い方は荒っぽいから，ちょっとうちのサンプルを分析するのは」というような言い方をされることもありますし，逆に「そういう方法があるのは分かっているけれども，もう2～3年たったらうちのほうがきちんとした分析ができるから，それまで待つ」とおっしゃる方もいらっしゃいます。それは非常に正直なご意見だと思いますが，分析することだけではなくて，やはり交流が大事なわけですよね。そういう意味では，もうちょっと何とかならないかというところはあります。

Q：私もそのときそう思いました。

Q：今の交流領域はもう少し何とかならないかというコメントについてちょっとお尋ねしたいというか，若手に向けてアドバイスをいただきたいと思うことがあります。日本研究において，外国と国内での研究が断絶しているということは日本文学においても感じますが，例えば日本文学の場合ですと，テキストを読めないと研究ができない部分がありますので，外国の方でもかなり日本語がお上手な方がいて，日本の研究者というのは日本語で論文を書けば，そういうことからいっていい部分があったのですが，やはりそれではいけないと考えている先生方も今出てきていらっしゃいます。

そんな中で，例えばマイヤズさんのように文科省の国費留学生という形で若手が来日し始めていますし，私のように帰国子女で研究をしている人間もいるので，その断絶の中でこの先どうやって橋渡しというか，つなぎにいけるかなというふうにちょこちょこ考えてはいるのですが，例えば私たちが一歩踏み出したときに，海外の日本研究の先生方がどういうサポートを，われわれにどういう期待をしてくださっているのかというのがいまひとつ分からないところもあります。ですから，先生から見た若手への期待といいますか，何かご助言いただければありがたいと思うのですが。

羽生：はい。結局最初のスライドまで戻らなくてはいけないと思うのですが，橋渡しが必要だということはみんな納得した上で，やはり日本と英米での研究にギャップがあるわけですよね。そのギャップがどこで出てくるかというと，やはりこの3つのどこにポイントを置くかということ。私は日本では確実に，データよりも理論のほうを重視している研究者だと思われていると思いますが，アメリカに行くと確実に，前に進める部分ではなくて前に進むところをやっている研究者だと思っている人が多いだろうと思います。ほかの人の評価はどうでもいいのですが，絶えずそこで動いているとき，今この辺を取りあえずやろうというスタンスがどうしてもずれてくるのだと思うのです。ですからずれてきたときに，英語で書くときにはあえて英語の研究者が知りたいところをプッシュして書くと。同じ自分の研究なのですが，日本向けの研究者にこう書いたものをどう書いたら英語で読んでいる人が面白いと思ってくれるだろうと，そこは発想を切りかえて同じ材料で2つ書く。

Q：オーディエンスになって。

羽生：オーディエンスになって書く。それは仕方がないかな。それをやっていくと，ポジティブに見れば同じ材料で論文は2本できるということになります。外国の人がおもしろいと思うものと，日本の研究者がこれは受け入れられる研究論文だと思うものはどうしても違いますよね。両方やっていたら身が持たないの

で副業としてどちらかはやるのだけれども，私はこのスタンスでやるというところはある程度のところで決めないとだめだと思います。

ただ考古の場合，私は，アメリカ向けで書くということでやってきたことで考えると，日本考古学の若い人たちに対する影響がどれだけあったかというと，非常に微々たるものでしかなかったというのは残念です。体力と気力があればもう少し書くべきなのだろうということはいつも思っていますし，自分の中でも波があって，古代文化を書いたときは「これはやはり日本の人たちにぜひこういうものを読んでもらいたい」という気合があるときがあってうわあっと書くときもあるし，今度やはり Full-professor に上がるに当たっては，日本ではあまり受けないかもしれないけれども，multi-vocality というのは私なりの理解はしたいのでこういう本を作ったし，と，両方いってもいいのですが，常に両方やるのではなくて，その時々によって今はこれをやるんだ，次はこれをやるのだというような形で。そのほうが効率もいいですからね。そうやっていくのがいいのかなと。

Q：足場を固めた上で，相手に応じて対応というか。

羽生：相手に応じてというか，自分がやっていることがどういうインパクトがあるのかということが，いろいろな興味を持っている人に分かるような形で出していく。いい雑誌に論文を書く。ちょっと背伸びしてでもたくさんの人が読んでくれるところに書くというのが一番ではないかと思います。

司会：それでは，時間も押してまいりましたので，これでワークショップを終了したいと思います。羽生先生，どうもありがとうございました。

羽生：ありがとうございました。

（拍手）

UC Berkeley 校の大学院教育
—考古学領域における次世代育成—

カリフォルニア大学バークリー校
羽生　淳子

スライド１

１. 考古学と大学院教育

１） 大学院教育の目的とは？
２） 日本考古学の目的
３） 北米考古学の目的

２. バークレー校の大学院教育と考古学

１） バークレー校の人類学科
２） バークレー校人類学科のPh.D.プログラム
３） アジア研究、日本研究との接点

３. 東アジア考古学研究室の活動

スライド２

１. 考古学と大学院教育

１） 大学院教育の目的とは？
２） 日本考古学の目的
３） 北米考古学の目的

スライド３

1) 大学院教育の目的とは？

１）新しいデータの取得
　データの解釈
　新しい理論的視点の提示

２） 学問全体に対する長期的なインパクト

スライド４

2) 日本考古学の目的

↑

日本考古学の長所
•膨大なデータの蓄積
•精密な科学的分析
•一般市民への成果還元
•「私達の祖先の歴史」を解明するという使命感
•行政担当者、アマチュアも含めた裾野の広さ

スライド５

現代日本考古学の問題点

- 理論的枠組の不明確さ
- 海外との交流の不足
- 学際的研究の必要性

スライド６

歴史的背景

•明治～大正期:　海外との積極的な交流
•第二次大戦後～1960年代:枠組としての史的唯物論
•高度経済成長期～1990年代:緊急発掘の増加と埋蔵文化財行政の整備
•1990年代後半～現在:緊急発掘の減少

スライド７

3）北米考古学の目的—目まぐるしく変化

英米考古学の歴史的背景
1. プロセスvs.ポストプロセス学派
2. マルチボーカリティと解釈の多様性
3. 環境考古学と文化の長期持続性

スライド８

1．プロセスvs. ポストプロセス学派（1980年代後半～1990年代前半）

論理実証主義（positivism）┐
科学としての考古学　│
解釈の客観性　│
機能主義　│への批判
進化の概念　│
生態学的アプローチ　┘

スライド９

ポストプロセス考古学の諸学派
（by Robert Preucel)

- **新マルクス主義系**
  社会の上部構造、特に搾取の実態をカモフラージュする道具としての社会・政治理念やイデオロギーに焦点
- **ポスト構造主義系**
  構造主義（物質文化背後の社会規制に焦点）→
  無機質な構造だけでなく、個人の能動性・主体性を考慮
- **フェミニズム系**
  男性中心の視点からの脱却
  過去における女性の役割を積極的に評価

スライド10

Explanation から Understanding　へ

- 生業・集落システムや政治組織等の解明
  ⇓
- 過去における個々人の行為や考え方、感じ方などの主観的な「理解」へ

スライド11

1990年代後半以降の英米考古学—再び多様化への道—

- **トリッガーらによるポストプロセス批判**
  – **通文化的比較の再評価**
  – **Hyper-relativism 批判（Trigger, Wylie etc.)**
  – **プロセスとポストプロセス考古学は補完的**

Bruce Trigger

スライド12

2. マルチボーカリティと解釈の多様性

考古学における解釈の性質

- 仮定に基づいた推論（仮説←→考古資料）
- 解釈の客観性の限界
  ＝現代社会の制約から逃れられない（政治・経済的背景）
- 過度の相対主義への警鐘

スライド13

マルチボーカリティの概念

- さまざまな立場の人がそれぞれの視点から複数の解釈を行う可能性を支持する考え方
  (考古学者, 他の分野の専門家, 地域市民, 遺跡を残した人々の子孫)
- マイノリティの視点を重視
  （e.g., ネイティヴ・アメリカン、アフリカン・アメリカン)
- 背景
  - ポストモダン、ポスト構造主義の思想
  - マイノリティの権利拡張をはじめとする社会運動
  - 過去に関する解釈は考古学者の占有物ではないという認識

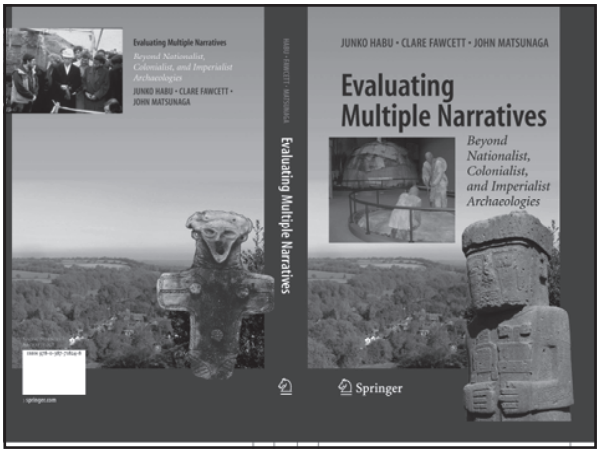
スライド14

ニューヨーク・アフリカ人墓地（18世紀）の発掘

（マイケル・ブレーキー教授）

http://www.africanburialground.gov/ABG_Main.htm

スライド15



スライド16

考古学者の責任

-推論の道筋を明示

-作業仮説としての複数の解釈

Interpretative options must be tested against multiple lines of archaeological evidence（Trigger, Blakey etc.)

-市民と共同で問題提起

Work with local residents and other stakeholders (Leone, Hodder, Blakey etc.)

スライド17

合衆国の再埋葬問題

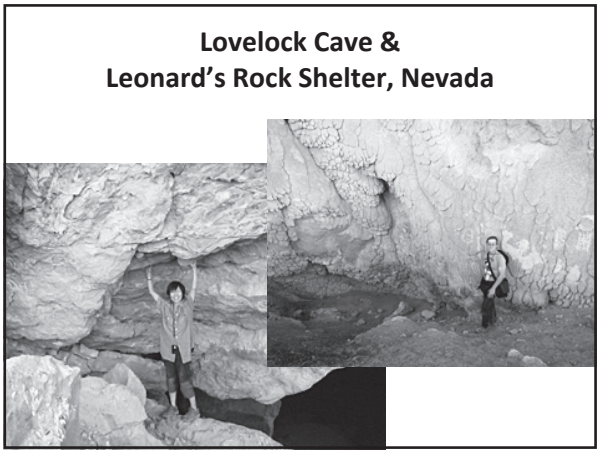
- ネイティヴ・アメリカン墓地の保護及び再埋葬に関する法令（Native American Graves Protection and Repatriation Act：NAGPRA）
- 過去に発掘されたネイティヴ・アメリカンの人骨や副葬品は、子孫が特定できる場合には返還
  （ただし、合衆国政府が公式に認めている部族に限る）

スライド18

スライド19

スライド20

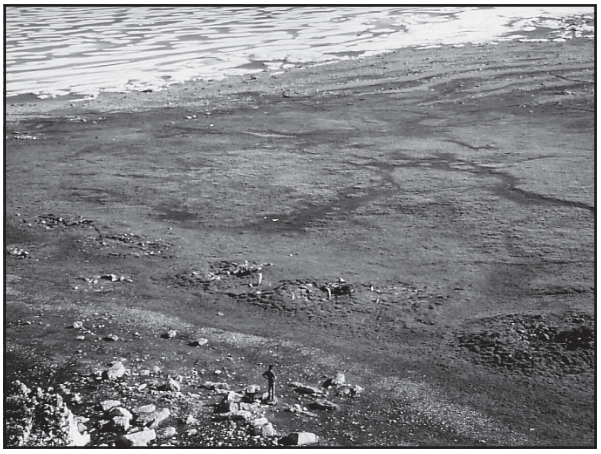
スライド21



スライド22

スライド23

スライド24



スライド25

環境考古学の復権 (2000～)

- **気候変動への関心**
- **持続可能性 Sustainability**
- **回復力 Resilience と脆弱性 Vulnerability**
- **Micro faunal and floral remains analyses**
- **Bioarchaeological Analyses**
- **歴史生態学の台頭**

スライド26

歴史生態学 HISTORICAL ECOLOGY

- **人間行動が環境に与える影響を重視（環境管理も含めて）**

Emphasis on the effects of human activity on their surrounding environment

- **過去の経済・社会システムが、世界各地に固有の歴史の軌跡を作り出した過程の解明**

Emphasis on historically unique trajectories of human socio-political and economic systems in different parts of the world.

- **文化の短期～長期的変化のプロセス解明**

Interest in the processes operating among temporal scale of varying duration

スライド27

Human-Environment Interaction

スライド28

私の研究の焦点

- 定住度 Sedentism
- 生業・食の多様性 Subsistence/Food Diversity
- 人口 Population と社会規模 Scale of Society
- 社会階層化 Social Inequality

↕

- 環境の変化 Environmental Change（気候変動・人間活動の環境への影響）

↓

文化の長期変化 Growth and Decline of Cultures
（cf. Sustainability/Collapse)

スライド29

2.バークレー校の大学院教育と考古学

1） **バークレー校の人類学科**
2） **バークレー校人類学科の大学院教育**
3） **アジア研究、日本研究との接点**

スライド30

1）バークレー校の人類学科

- 文化人類学
- 考古学

****

- 生物（形質）人類学
- 言語人類学

スライド31

文化人類学のセクション
http://anthropology.berkeley.edu/people

- Paul Rabinow
- Laura Nader 他 計16名 （下記を含めて ）

Medical Anthropology
- Charles Briggs
- Nancy Scheper-Hughes
- Laurence Cohen

Linguistic Anthropology
- Bill Hanks

Biological Anthropology
- Terry Deacon

スライド32

考古学のセクション (計10名）

- Ruth Tringham
- Rosemary Joyce
- Meg Conkey
- Laurie Wilkie
- Sabrina Agarwal
- Steve Scheckley
- Christine Hastorf
- Kent Lightfoot
- Pat Kirch
- Junko Habu

スライド33

2）バークレー人類学科のPh.D.プログラム

- MAプログラムなし（1年目の終わりに口頭試問）
- 各学期12単位必修
- Resident Fees + Non-Resident Tuition
- 種々の奨学金 ＋Grad Student Instructorship
- 3 年目の終わりにOral Qualifying Exam でField Statements とThesis Proposal をディフェンス
- 通常、6年～8年間で博士論文提出
- 外国人学生少

スライド34

必修科目・試験

- Anthro 229A&B （考古理論と方法論）
- Outside Area（自分の専門以外の地域）
- Practical Method (e.g., Paleoethnobotany)
- Language Exam
- Outside Member's Class (他学部の授業）
- 3 Field Statements (Theory, Method & Area)

スライド35

3） アジア研究・日本研究との接点

- Institute of East Asian Studies
- Center for Japanese Studies

Organized Research Unit (学内の研究組織）

-学生に奨学金
-シンポジウムやワークショップ
http://ieas.berkeley.edu/events/2008.09.19w.html

スライド36

アジア研究グループのMAプログラム（Group in Asian Studies)

- 日本語（あるいは中国語・韓国語）重視
- 2年で修了
- 日本史とEALCの博士課程への進学率高
- アジア研究の博士課程も有（ただし少数）

スライド37

3. 東アジア考古学研究室の活動

- 定住度 Sedentism
- 生業の多様性 Subsistence Diversity
- 人口 Population
- 社会階層化　Social Inequality

↕

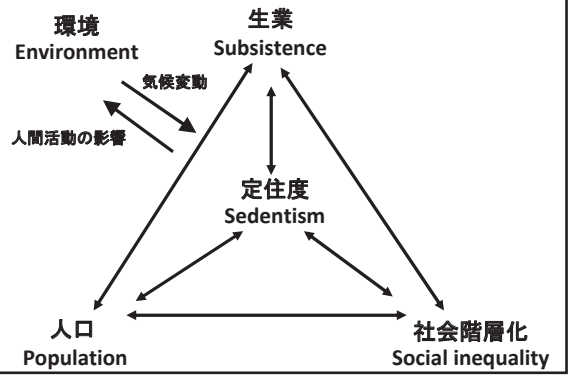
- 環境の変化 Environmental Change（気候変動・人間活動の環境への影響）

↓

文化の盛衰 Growth and Decline of Cultures
（cf. Sustainability/Collapse)

スライド38

文化変化の条件・原因・結果を考える



スライド39

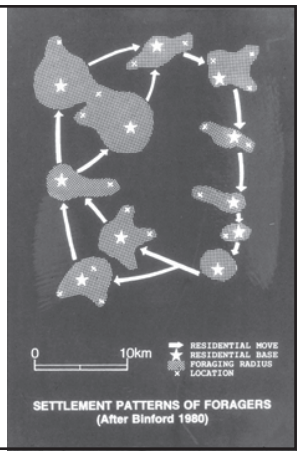
旧石器時代～完新世後半への変化

- 生業の中心：大型動物→中型動物→植物・魚
- 環境管理（Environmental Management)の重要性
- 定住度と生業の多様性(幅）

（ジェネラリストVSスペシャリスト）

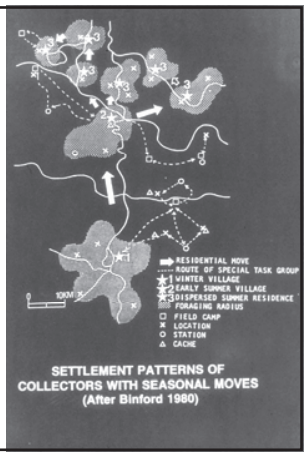
スライド40

Settlement Patterns of Generalists (Mobile Hunter-Gatherers)



スライド41

Settlement Patterns of Specialists (Seasonally Sedentary Hunter-Gatherers)



スライド42

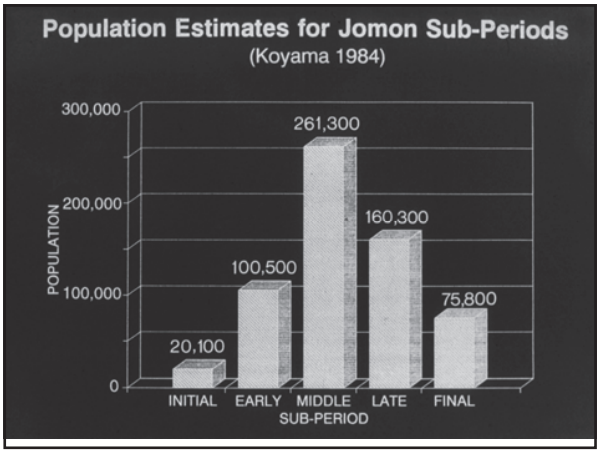
Human-Environment Interaction

スライド 43

Archaeology of the Jomon Period (ca. 16,000-500 BC)

- An opportunity to examine short- & long-term changes in human-environment interaction

スライド 44



スライド 45

三内丸山遺跡

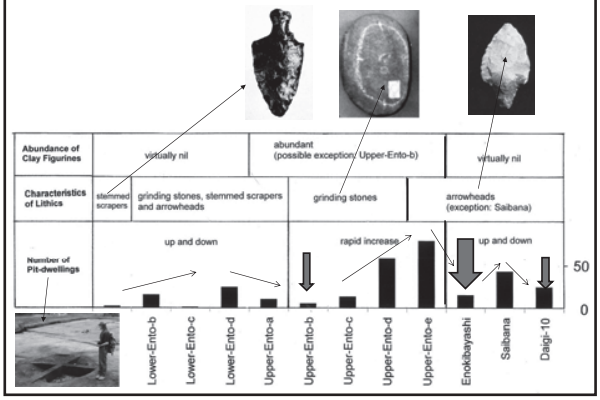
スライド 46

Pottery Chronology at Sannai Maruyama

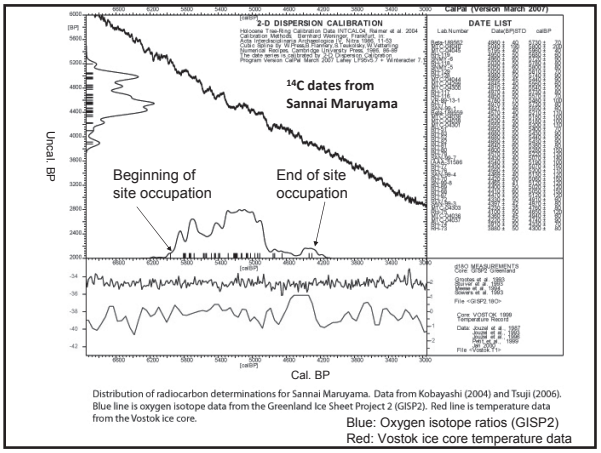
Early Jomon 前期	Lower-Ento-a 円筒下層a	5900 cal. B.P.
	Lower-Ento-b	
	Lower-Ento-c	
	Lower-Endo-d	5300 cal. B.P.
Middle Jomon 中期	Upper-Ento-a	
	Upper-Ento-b	
	Upper-Ento-c	
	Upper-Ento-d	
	Upper-Ento-e	4800 cal. B.P.
	Enoki-bayashi 榎林	
	Saibana 最花	
	Daigi 10 大木10	4300 cal. B.P.

スライド 47

Changes at Sannai Maruyama



スライド 48



Distribution of radiocarbon determinations for Sannai Maruyama. Data from Kobayashi (2004) and Tsuji (2006). Blue line is oxygen isotope data from the Greenland Ice Sheet Project 2 (GISP2). Red line is temperature data from the Vostok ice core.

スライド49

スライド50

バークリーの青森プロジェクト

（1）生業・集落・社会の長期変化のメカニズム

（2）狩猟採集民の定住度・生業の多様性と環境との関係

（3）地域・地球環境に人間活動が与えた影響

スライド51

Hunter-Gatherers in the Local and Global Environment

- 考古学と民族誌から見た人間－環境の相互作用
- さまざまな時・空間スケール
- 先史時代から現代に至る狩猟採集民文化の盛衰とそのメカニズム
- 過去からの教訓と現在直面する課題
- 環境人類学の一分野としての狩猟採集・環境管理の研究

スライド52

考古学の可能性と問題点

可能性

1. 長期的変化の研究が可能（マクロ）
2. 人々の生活にアプローチできる（ミクロ）

問題点

1. 物質文化→人間の行動・思考・文化・社会
   両者をつなぐモデルの重要性(←民族誌 etc.)
2. 現代社会との関わりに関する議論が不足

↓

- **地球環境問題の視点から研究の方向性を再設定**
- **ネイティヴ・アメリカンを含む先住民の人々や、他の stakeholders との共同作業の必要性**

スライド53

まとめ：
考古学領域における次世代育成

1）データの取得・解釈・理論的議論のバランス
2）学問全体に対する長期的なインパクト
3）国際的な学問の流れ
4）学際的研究
5）社会の中の考古学
6）地球環境問題への貢献

スライド54